

547

243



始



三田村鳶魚著



版のはり唄

東京 春陽堂版

大正

15. 9. 9

内交

弁言

我等が集めて置いた瓦板の流行唄、その東京に最も近い江戸の出版物であるのを興味にして、所藏の中から少々世間に問ふ心持になつた、別に撰擇したのでもなく、片端から或る分量を採り出したのだ。

一體落首や落書を民衆の聲だなどといふのは誰だい、江戸の民衆が落首落書に興じる程の素地があつたと思ふのが馬鹿々々しい、何として政治の理解があらう、吏務の批判があらう、殊に幕府の機微に觸れよう、民衆は其れ等についての智識も機會も持つて居ない、無論其の作者は市井に居らぬ、従つて民衆の腹心を描出したものではない、それ處か落首落書の作者は民衆を考へようと思へぬ、全く作者自身の暴露に過ぎない、恐らく民衆とは關係のないものだ、我等は何時か落首落書の製造人について云ひ試みたくも思つて居る。

其處へ往くと嘉永以後の瓦板は、時勢が時勢だけに流石に氣樂な江戸の民衆も例の通り澄しては居られない、其の時の彼等の態度は流行唄の中に隠し切れない、此の作者は民衆の中にあつて、十分民衆の心持に通じて居る、江戸の民衆生活の概略を讀むには是程都合の好いものはなからう、我等は敢て江戸ツ子研究第一の文献として、憚りながら此の冊子を提出する、瓦板は讀賣に依つて行賣された、我等は江戸の讀賣を知らない、菊地貴一郎氏の記述を撮録して置かう。

讀賣といふものに數種あり、三四人より六七人づゝ伍をなして、時の出來事を探り、公に關せざる珍しき事ある時は、善惡共即時に印版に起し、駿河半紙といふ紙に摺立たるを、互に珍しさに呼び歩く、サ此は此度世にも珍しき次第は、高田の馬場の仇討などいひて賣あるあり。

大火ある時は焼場所を圖面に起し、焼失したる戸數屋敷寺社町名町數、火消の消止より死傷の次第を明細に印して賣る、地震暴風天變地異ある時も同じく印して賣るなり、また敷物を路傍に敷て店を張り、坐して賣ものは大火の記事を面白く讀聞せつゝ賣なり、また路傍に立て圖面を手にて持て賣るあり、焼場方角場所付を御覽なさいといひながら歩きつゝ賣るあり。

教訓の歌また心學の道歌などを小冊としたるを讀聞せつゝ路傍に立て賣るもあり、流行歌を謠ひて賣る讀賣は、舟子のかむる様なる編笠、少しく形の變りたるを深くなく淺くなく宜敷加減にかむり、笠の下には手巾の模様を粹なるを染出せるを天窓よりたれて、左右の肩にかけてたるは、野邊の柳の間より衣かつぎたる女を見るが如く、流行の縞柄色合を好みて裁縫も念を綿入に、三尺帯は上下に過さず、前を除けて苦勞して結びたる甲斐ありて緩急の加減を失はず、手の指の先より足の指先迄、垢のあの字も止めぬは、惜しむらくは衛生喧しからぬ時代、其賞を得ぬこそ殘念といふべく、細く削りたる竹の箸の如き棒を持ちて、左に持ちたる流行節の印本をポント打て謠出す、夜中なれば襟より小提灯をつりたるを前へ少し出し、時によりて

は三味線を入れて謠ひ來るもあり、此讀賣は下町邊に限りたり。

此の文で詳悉して居る、讀賣の枚数は上下四枚が通例だが、弘化の伊豫節は三枚づゝ、六枚のがあり、安政のヤンレイくどきは六枚のが多い、チヨンガレには八枚のが出来、阿房陀羅經は十二枚になつた、其の代價は武田信賢氏の記憶では廿五文から三十文ほどであつたといふ。

また瓦板といふ名稱については、瓦版ではなく河原版、即ち四條河原の興行物に關する板行だといふ説も聞いて居るが、角松更氏が讀賣は古くより榛木版行はれ、後には全く瓦板が棄たらしい、しかし元祿十年刊の俳諧塗笠に、

關がしや心中おこす土版木

といふのがあるから、其の頃までは所謂瓦版が榛木版と併行して居たらうと云ふのが宜しからう、瓦版といふのは此の土版木のことなのだ。

此の冊子に收刊するものは孰れも江戸末の發行であるから、土版木らしいのではない、

榛の木へ彫つたらしく見えるのさへ尠いが、見本になりさうな數點を別刷にして挿んで置いた。

江戸大地震くどきの表紙と第一頁とは、他のものと違つた板式で、それが如何にも災後の總罔を現はして居る。

こまりもの一つとせぶしの表紙に描いた異人さんは、其の時代に毛唐人を眺めた江戸民衆の心持ちが出て居るやうに思はれる。

やつちよるぶしの表紙に畫いた四ツ手駕籠は、今日から假宅通ひの模様を想察させるのに好い、四ツ手と山駕籠は同物であつても、名稱の違ふと共に洒落たものゝやうに思はれる、駕籠で飛ばす、翼でもあるかのやうに云ひもした、さうして假宅へ往くのが、昔の人には嬉しかつたのである。

おもしろぶしの表紙に寄席の掛りを畫いた、明治二十年頃までは其の通りであつたが、今日は全く見違へた、此の瓦版は自作が尠いと云はれて居る、都々一坊扇歌作と

あるのと共に、此の表紙も珍重になつた。

名人とつちりとんに扇歌の坊主姿のあるのも面白からう。

口繪にしたのは見立繪で五代目菊五郎の讀賣である。

爰に收刊したゞけを讀んでも江戸ッ子を暴露したもののなのが知れよう、其の暴露に依つて誰も江戸ッ子が意外なものだつたのに呆れもしよう、我等は又た別に驚かされた、從來大概に江戸訛りを『しば(芝)と名が付きや、しばち(火鉢)にしばし(火箸)、大根の頭も干せばしば(干葉)』ぐらゐなものと思つて居たのに、訛りも訛り、また其の上にも未だ曾つて豫想もして居なかつた横訛りやら、片言やら僻辭やらが使用されて居た、是ではペランメイ階級に使用される言葉は、遠國他國に通用しないばかりでなく、同じ江戸の中でも他の階級には通用しない。今にして昔の老輩が酷く下品な言葉を嫌ひ、言葉遣ひで身分が知れるといつて、子女の訓育に此の躰を嚴重にしたのを感服する、譬へば今日淑女令嬢等がお遣ひなさる『いゝわア』、語尾に添へたワや、『よく

ツてよ』のヨは、昔の幼女のみが使用した、それも裏屋住居の幼女に限つた、それを子供らしく見せたい爲めに、雛妓(其處から出身しても居る)が襲用し、更に藝者が冒用して、相應な身柄な方々まで御使用なさるやうになつたのである、是は訛りとか横訛りとかいふべきものではないが、江戸の或る社會階級の習慣と見るべき語僻である、斯ういふやうに訛りの外に幾多の習癖があつて、特殊な語形や語意を持つて居る、従つて江戸語の研究には瓦版が大切な資料である、大體ペランメイ階級の言語を書いたものが尠い、文化以來の中本が無二の記録のただけれども、それさへ文章化して居る、畢竟彼等に讀ませるためのものでなく、彼等を他の階級に見せる仕向けのものであるから、赤裸々に提出されて居ないのだ、然るに瓦版は彼等の受用を主としたゞけに、些少でも修飾すれば受用者を迷惑させるのだ、彼等に分りのいゝやうに、彼等の心に思ひ彼等の口から出たやうに書いてあるのだ、其處が誠に好都合である。

我等は蒐集した度毎に其の一つ一つに、思ふ任を書き附けて置いた、それは其の時

に爾後の研究の目標までに書いたので、無論定説でも斷按でもないのみならず、偶感
 をさへ取難へた、本より即筆即記だけに間違ひもあらう、今度の公刊には删除すべき
 性質のものなのだ、けれども若し何かの役に立つまいものでもないやうな氣もして、
 其の儘に刊行することにした、徒に自分の味劣を掩はんが爲めに、些少でも他の研究
 を刺激する効用を忘れ難い、縦へ笑はれても、其の笑はれたのを縁として、自分の間
 違に心附けば、嘲笑にも亦た多大の恩を感じる。

寅の五月樺色鮮な木蓮華の咲いた時、

鳶魚幽人記

瓦版のはやり唄

目次

新板流行一中くずし 一
 忍び駒——雪見ふね——黙阿彌の日記
 十二ヶ月はうた 四
 閏五月——江戸の花——流行の外
 深川名寄假宅はうた 一〇
 假宅は明和五年以來——天保から慶應まで六度
 新板流行唄とてつるけんぶし 一五
 信州大地震——河原崎座の所作拳

四季十二ヶ月早ことじんくづし……………二八

字餘りから早間——拍子の差

白糸くどきやんれいぶし……………二三

有名な替女唄——無實な心中

石童丸かるかやくどき……………三四

説經うつし——古くなつた少年物

權八小紫くどき……………四〇

ヤンレイの一般型式——大道藝

小栗判官照手姫くどき……………四六

方向轉換——同時に改名

おしゆん傳兵衛くどき……………五〇

富本から——文句の向上

中山道越後くどき……………五六

戀路にたとへ——鐵道唱歌

お吉清二くどき……………六〇

『こんどサア』の有無——現代物

しんぢうくどきぶし……………六三

心中くどきと改名——明治も十年前後

湯本心中くどき……………六八

確定日付——篤胤流行の飛沫

江戸大火ぢしんくどき……………七四

假名垣替文の作——變り物

しん板江戸大地震くどき……………八三

災後の先元版——吉原のすり鉢穴

安政六年七月關東大水之次第……………七

義販の景氣——汝に人心ありやと問ふ

鹿兒島太平くどき……………九〇

文明開化の御利益——體裁の變化

見立十二ヶ月よき聲ぶし……………一〇一

女の十二種類——半園ひの激増

假宅流行伊名勢ぶし……………一〇八

奥山の生人形——長屋遊び

色里伊名勢ぶし……………一一三

彦三が龜藏——地震後の假宅

淨るりさわり文句よいわいなぶし……………一二六

義太夫で賑ふ——嘉永以降の寄席

地震ぼくくよしこのぶし……………一三三

おあいだ番附——阿房陀羅經の影響

假宅やつちよるぶし……………一三六

六七年續く——炮烙訓練の大評判

新内仇文句虎のまき物……………一三九

仇つばいのが騒がれる——二上りの情味

傾城買道樂さんげく……………一三六

祭文の模倣——アホダラ調子

松づくし……………一四〇

大黒舞の轉化——役者づくし嫖客づくし

道樂寺阿房陀羅經……………一四三

阿房陀羅經の型式——橋本町の願人坊主

同 一四八

アホダラの變型——石町の稻荷鮎

鹿兒島戰爭道樂寺阿房陀羅經 一五九

明治新製のアホダラ——大まぬけな代物

世の中困りもの一ツトセぶし 一六五

横濱開港——ラシヤメン第一號

新板諸色一ツトセぶし 一六九

文久錢値上げ——長州征伐

八百屋お七からくり口上 一七七

視機關の斷絶——カラクリ節の俗謠

ちよぼくれちよんがれ焼山峠順禮殺 一八一

上州祭文の變態——浪花節の祖先

ちよんきな替唄忠臣藏 一九〇

都々逸拳——横濱好み

兩國八景いよぶし 一九四

民衆娛樂の狀況——中間階級の遞減

新板はうたいよぶし 一九八

弘化二年の讀賣——夜鷹の細見

はうたいよぶし 二〇一

大坂まで——始末屋

すちやらかぼくく 二〇五

元祿といふ觸込み——春風亭年枝

はいよぶし 二〇九

大奥の放火事件——稻荷鮎

來ル和十二ヶ月都津千里登舞……………二二七

カイランは不可解——待つ宵

よし原八景とつちりとん……………二二四

焼直して流行——寛政の末

東自慢名人とつちりとん……………二二八

都々坊五代——越後訛を御坐興

新板大津繪ぶし……………二三四

海老藏の改名——安政の流行言葉

江戸の花向島八景大つゑぶし……………二三七

兩國の賑ひ——麥湯の女

江戸紫あふつへ葉うたぶし……………二四一

文久以後——鳥屋の番頭

新板厄拂……………二四七

いろく々な替文句——年中二度の厄拂

風流はうた富本外題……………二五三

お嬢様のお稽古——櫻草の花壇

世の中面白ぶし……………二五七

寄席と讀賣——扇歌の人氣

月雪花撰文句とゞいつぶし……………二六〇

謎坊主に續く——弘化度の大評判

尾上の松夫婦とゞ一……………二六四

吹けば飛ぶ玉や——意氣で律義で野暮

あさ直しおつこち都々一ぶし……………二六六

文久の通言——おつこち絞

新内心いきとど一.....二五〇

文政の清元入り——字餘りの早口

しん内心いき都々一.....二六六

洗ひ髪へ新わら——両性相互の忌避

御ふじ山新もんく.....二七九

婦女の富士登山——櫻田事變直後

新作文句成田ぶし.....二八四

新勝寺の宣傳——慶應三年の改築

東海道こちやゑぶし.....二八九

是も替唄——おまへまちくの變化

——目次——終



新板りゆうこう一中くずし



▲きよふはいかなる吉日よ、めぐりあふよのうれしさは、上とびたつほどに、おもへども、人目あふけりや、まゝならぬ合しんきしんくのくのせかい。

▲わすれよふぞと、ちやわんざげ、のめばなをさらおもひだし、上ぐちなことおばか
んがへて、やつれやせるも、こゝろがら、合まゝにならぬが、世のなかじや。

新板りゆうこう一中くずし

▲ぐちになるほどあいとうて、うそもまこともいゝつくし上夜ごとに、あわねば、わしやきにかゝり、ぬしのてくだにのせらりよと合どうなとさんせ、いとやせん。
▲しきよせて、ねじめもくるう、さみせん、かよふこいじの、いとみちも上きれて人めを、しのびごま、ひくにひかれぬ、まゝのかは合あたるわがみにおやのばち。

下

▲あおばしげるや、なつこたち、はるかきもいをみあぐれば上月がないたか、ほとゝぎす、おもはせぶりな、ひとこゑは合じつにうれしいじやないかいな。
▲はらをたゝせつ、はらたちつ、あけのからすにおこされて上うらみるものは、あけのかね、うはきざかりが、はやすぎて、いまはたがいじつくらべ。
▲ゆきのふるよは、もくぼじの、ふねのさむさをこらへつゝ上しんに二人が、おきごたつ、つがいはなれぬ、みやこどり合うれしいゑんじやないかいな。

▲あきよかせの、みにしみて、たれをまつむし、ねもほそく上きぬたにむすぶ、さほしかの、つまをしとうて、よぶこどり合いとらしいじやないかいな。

曾て河竹黙阿彌の日記を見たが、其の天保七年の處に、流行小唄、一中くづしとして、唄數しかく書き附けてあつた、其の一つを控へて置いたが、それは『今日はいかなる吉日よ、めぐり逢ふたる嬉しさに、飛立つやうに思へども、人目ありやこそまゝならぬ、しんきしんくの苦の世界』といふので、恰も此の開卷第一のものである。

▲かたいきせうもさみだれ月に、しやうきう(長久)しなふこいのみち、上^へぬしにしみ
くおふてうれしや、二世も三世も神かけて、ふかいゑにしのおだまくら、ほんに心も
ふきながし、上^へたがいのにのぼりつめたる。しやうぶついたる、むつごとはとこの内。

閏五月

▲あふてうれしき、よいかしはもち、あまりおまへのきのへから、上^へわたしやきの
と^へおもへまわせば、ひのへもみづにこがれつ、ねがいかのへし、その時は、つ
ちのへふまで、ぬしのそば、上^へなんのかのと^へいわりやうと、みづのへたにんじや
あるま^へし、そわしやんせ。

六月

▲心うきたつ天王まつり、さ^へのきげんできをいさめ、上^へ日よし山王なだかきさい

れい、どんくかつかのさるとりでわたる、ひやうしもうちそろひ、たいこ三みせん
太夫しう、上^へねんばんおどりやたいにてこまい、きやりでねりこみは江戸のはな。

七月

▲年にいちどの七夕さまよ、ま^へにならない身のいんが、上^へ心づくしてかいたきし
やうは、ふでにおもひのふみのぶん、かへすくのくりことば、さ^へに五しきのい
ろがみも、上^へ玉ちるつゆにぬるよはふりにあわれぬあまの川、つらにくや。

八月

▲月のなごころみわさらしなのすいたす^へきのそのなかへ、上^へ水にちらくうつる
たごとは、心さへたるみねの月 はれてあわれる十五夜に月がとりもつあきのよ
に、上^へ初^{はつ}こへのむすめ月みは、むつごともる、とこのうち、はづかしや。

九月

▲おもひこめたる此まき紙のへんじ、きく月文のつて、上いきな小ぎくのかをば白菊、つきまかづく、かさね菊、いろもうつくしべに菊に、そまるき菊のゑにしえは、上心もちぬらぬおとめぎく、すがたやさしきかむろ菊、しをらしや。

十月

▲ひどにおまへのおかほをば、みれど、はれてあはれぬ身のつらさ、上ゑんをさだめるいろのいづもへ、むりなしうびして大社、むすぶゑにしは神さまへ、きせいかけたるこひなかも、上人めのせきのあるゆへ、ほんに二人はまゝならぬうきよじやへ。

十一月

▲わしもくとみなゆくなかに遊山はんぶんあさ草の、上さてもうつくし花のかほみせ、やくしやぞろひに玉ぞろい、きやくは四ツでのほどよし原へ、かよいなれたる土手八町、上つくりしゑもん坂には、こよい大門、しつほりととりの町。

十二月

▲くれはあさ草くはんおん様よ、くんじゆなすこと人の山、上ゑんぎきつそを千兩箱から百兩づゝみにみだしがね、はしらかくしや、くまでつきべ松かざりにふくだわら、上いみはまはごいたや、○○○○○○○○○○○○○○○○、かわしやんせ。

江戸の年中行事が唄になつて居るから、今日になつては面白い、當時としては流行の外に立つべき歌詞だと思ふ、文句では受けないが其の替りに何時も棄てられないものであつたらう、それから閏の五月のあるのは弘化三年だ、従つて此の歌詞は同年の製作であらう。

深川名よせかりたくはうた

一の鳥居

▲すいた 二江す原や、わしやはれこんで、つもるこいじの 一江山田屋で。
 上 一江新金本 はぬしゆへと、どんなおまへが 丁角岡本 とひとに升きのか
丁角倉田屋 で 丁角辨天いせや にがんをかけ、上 一京みなとや 人にわらわり
 うと、ぬしとわたしの やあ田中屋 は 一京龜や せぬ。

同所

▲まつに 二京松金澤 かいあつてねごう 二京金澤 京けのしうび、上 上ぬしにこ
 よいわ 一京近江 うれしさ、かははにつこり 丁角大黒や つもるこいじは山へ

とはなすはなしも 二江さかいや で、上 上こよいも 世け長や とわかれのつら
 きにひきとめてそで 二京すどき。

やぐら下

▲いきな 丁角伊せ本 かよいのきやくは、心 一江山本、一京しんさがみ、上あ
 だな 一江谷本 つのる 丁角つの國 いきな 一京いづも のいろの里、うか
 りくくと 二江稻本 で文のへんじを 松ば長屋、そのかいゑんの 西がしつる
やで、大く 一江大こく よつぎ長屋、なびかんせ。

西横町

▲いせいかり宅ならびの見せに大せいまつきでみな通、上 上あがる 二江山田屋
 すいた 一京玉屋 に島さんこんさんきらいなく、すがたみかへる 二江三河

深川名よせかりたくはうた

屋で、丁角かじまや、丁角ゑちせん、一江山しろや、大入
丁角かのふ、丁角
 大こく、どんく、二京さがみや、いろのさとなびかんせ。

よこやぐら

▲花の丁角東や、二京わし尾くと二京丁子よく、上か
 たい西が木村も心うかくすがたやさしき二京小紅屋わとしま二京新わ
 し尾へだてなくおはんな二京升屋と里ことば、上あいたいみたいきたい
 とさやくの丁角ゑびすやさを出し、一京つるとまれ、

仲町

▲いきな深川、わしやうかくと、あだな二京江川にほれこんで、上ころ
丁角ふく住ふかくなりそめ、わたしやせくやら、二江さがみやら、へんし

二江若松、わかくと二江岸川中村京のしび、上こよいはぬしに二江
大のや、たがいに一江三浦やかほとかは、はづかしや。

新吉原が假宅で營業したことは、明和五年四月六日江戸町四ツ目屋喜太郎方から出
 火して全廓を焼失した時に、日數百日を限り、並木今戸等へ假宅を許したのに始まる、
 其の以前には無い事だ、明和以後には火災の度毎に假宅するのが定例のやうになつた。
 差當つて天保以後の假宅を云へば、

弘化二年十二月五日の火災の爲めに、日數二百五十日間、花川戸山の宿本所深川へ
 假宅した。

安政二年十月二日、大地震に依つて、五百日間の筈で、東仲町馬道田町本所深川へ
 假宅し、元地へ復歸したのは六百日目であつた。

萬延元年九月廿九日に全廓焼失し、本所深川根津へ假宅し、同年十一月廿四日元

深川名よせかりたくはうた

地へ復歸した。

文久二年十一月十四日の大焼けで、七百日間本所深川へ假宅した。

元治元年正月廿六日元地工事中に火災に掛り引續き假宅し、

慶應二年十一月十一日の火事で、二年間の期限で深川へ假宅した。

此の中の孰れの時のが此の唄になつたのか、大分萬延度の假宅であらうと思ふ、假宅の景氣の凄しいことは驚くべきものであつたが、斯う唄にして讀賣になつたのを見ても首肯されやう。

新板はやりうたとつるけんぶし

▲かねがたきで、ごうよくは、〽よぶもおい〽三〽ゑほど、〽小でふちんぶらぶらおさきへまいりましよ、合とつちんくちりとつん、〽ざんざらくやぶれかさ、〽定九郎に與一兵衛がゑぐられた、〽しゝはほふくとつるてん、てつぼふで、さアきなせへ、二ツ玉でめいりやしよ、ちよちよんがよをんやま

▲おちやは山本、酒は四方、しよふゆとしまやにかぎります、ごふく正札大丸屋へおいでなせへ、ソレ合じやみばすにしめはおきなやで、とらやはほやくあつたかで、いなりさまでサアきなせへ、すなわちまいりやしよ、

▲さてもしなの、大地しん、やまのうなりにけぶがたつ、家ぐる〽茶臼でまわりましよ、だいちはいみわれて水が出る合ばさまに子どもはまご〽で、あんまははう

く田へころぶ、かゝアどんサアまいりましょ、チヨ〜ンガヨイヤサ

▲西はくろ雲いおふ山、柏戸友づな、ひでのやま、いりはどろ〜あら馬で、まいりましょ合どん〜大入で、おふ淀御用木ちとせ川、あまつはとふじのおてとりてん、大男でサアきなせへ、チヨ〜ンガヨイヤサ

▲ひがし常山いな川にかぐみいわには、かなめ石、關ならんであら熊でまいりましょ、合どふでもてとりはつるぎざん、かつらの小柳なみ渡り、むさしのぱり〜おてとりで、もみぢ川でサアきなせへ、大あたりでまいりましょ。

▲げいわ歌右衛門みよしやで、かゆふしうかに菊二郎、きやくはぞろ〜ひろちでまいりやしよ合かん三羽左衛門かわら崎合梅幸せき三彦三郎、こうらいやがぱり〜大あたり、紀の國やでサアきなせへ、かん彌でまいりましょ。

▲扱もはやるは八代目、はいるおきやくは多見藏、つね世と糸三でまいりましょ合じやんじやか〜大友三津右衛門芝十郎はことら、はう〜なかつるてん、三升で

サアきなせへ、チヨ〜ンガヨイヤサ

弘化四年河原崎座の春狂言に笑門俄七福といふ所作があつた、其の拳詞が大受けであつて、様々に摸倣されて當時の大流行となつた、さうして明治になつても彼の拳詞の摸倣が新作された、それについては既刊鳶魚劇談の中に述べて置いた。

リ上 四季十二ヶ月はやことじんくくづし

〽一夜あければ、かど松禮^{まつれい}しやに、まんざい、とりおひしやらく、道中すごろく、おたからく、あないち、こまどり大だこあけたか、ねへさん、はねをつく、大きなおいどをしりふりまする。

〽いなりまつりや、うち子中^{こぢうち}、じ口^{ぐち}あんどん、ふじだな、おのぼり、あぶらけ、こわめし、きつねがたらふく、たぬきがぐちいふ、子どもがよろこぶ、かくらのばかおどり。

〽花のやよひは向ふ島、おさゝのきげんで、土手をばみめぐり、お茶屋のあねさん、きつねできなせ、かへりに夜ざくら、おひらんながめて、かうしてくびはさむ。

〽四月八日は、おしやかの御たんじよう、いかにしうしをひろめるとて、おさけもの

まずに、あまちやをのんで、へんくくさばな、いたゞきさかなで、はだかであかれます。

〽五月のぼりや、ちまきにかしわ餅、せうぶがたなや、よしつね、べんけい、ぢんがうこうがう、かとうのとらがり、せうきがにらめば、おにめがこわがる、大きなこいをあげ。

〽日吉三王^{ひよしさんわう}御さいれい、どんくかつかに、さる鳥、けいごにげいしやのてこまい、地^ぢばしり、屋^やたいに、すてゝんてれつく、じやのめのからかさ、うみほうづきや、たんばほうづき。

〽しきしあげます七夕まつり、ぬきのとふろや、ほんくおどり、うそつきやしたぬく、十六日には、じごくで、おにめが、おかまのふたあけ、ゑんまのわらひがほ、うさぎやなに見てはねまする、十五夜お月さま、みるから、うかれる、つきぬきだんごに、すしきにゑだがき、ゑだまめ、いもくり大きな濱^{はま}ぐり、みなさんおすき

新板白糸くどきやんれいぶし

上

花のサアエ、大江戸のそのかたわらに、扱もめづらしいしんぢうばなし、ところ四ッ谷のしんじく町の、こんののれんにききやうのもんは、おとにきこへしはしもとやとてあまた女郎衆の有其中に、おしよく女郎の白糸こそは、としは十九で、とうせいそだち、あいきやうよければみな人さんが、われもくとなさしであがる、わけておきやくは、どなたときけば、はるは花さくあお山へんに、鈴木主水といふさむらいは、女房もちにて二人の子供、五ツ三ツはいたいけざかり、二人り子供のあるそのなかで、今日もあすも女郎かいばかり、みるに見かねて女房のおやす、ある日我妻主水にむかい、これさ我妻主水さまよ、わしが女房でやくのじやないが、子供二人りはだてには

もたぬ、十九はたちのみぢあるまいし、人にいけんもいふとしごろで、やめておくれよ女郎かいばかり、金のなる木は、もちやしやんすまい、どうせきれるの六段目には、つれてにげるか、しんじうするか、二ツ一ツのしやんとみえる、したが二りの子供がふびん、子供二りとわしが身おば、すへわどふする主水様よ、いへば主水ははらたちがほで、なんのこしやくな女房のいけん、おのが心でやまないものが、女房ぐらいのいけんじややまぬ、ぐちなそちよりや女郎衆がかわい、それがいやなら、その子をつれて、そちのおさとへでてゆかしやんせ、あいそづかしの主水がことば、またも主水はこやけになりて、いで、ゆくのは女郎かいすがたヤンレイ、あとでサアエ、お安は扱くやしやな、いかに男のわがま、じやとて、しんでみせよとかくごはすれど、五ツ三ツの子にしかされて、しぬにやしなれず、なげいていけば、五ツなる子が、ぞばへとよつて、これさかゝさん、なせなかしやんす、きしよくわるくばおくすりあがれ、どこぞいたくばさすりこあげよ、こぞうなきます、ちくくたさんせ、いへばお安は、かをふりあ

げて、どこもいたくて、なくのじやないが、おさなけれども、よふきけぼうや、あま
 りと、さん、み持がわるい、いけんすればな、こしやくなやつと、たぶさつかんで、
 ちやうちやくなさる、わたしや、ざんねん、じがいをしよと、かくごすればな、われ
 らがふびん、どうせ女房のいけんじややまぬ、さればこれから新宿町の、女郎衆たの
 んでいけんをしよと、三ツになる子をせなかにおぶい、五ツなる子のてをひきまして、
 いで、ゆくのは、さもあわれなり、ゆけばほどなく新宿町よ、見せののれんに橋本や
 とて、みればおもてに主水がぞうり、それとみるより、こちよくをまねき、わしは、
川橋
下女おふれ
おちよし也
 こちらの白糸さんに、とうぞあいたい、あわしておくれ、あいとこちよくは、二かい
 へ上り、これさ姉さん白糸さんよ、どこな女ちうか、しらないかたが、何かおまへに
 用有りそうに、あふてやらんせ白糸さんよ、いへば白糸二かいからおりてヤンイわ
 しをサアエ、たづぬる女中といふは、おまへさんかへ、どちらでござる、わしはあを山
 主水が女房、おまへみかけてたのみがござる、主水身分はつとめのみぶん、日々のつ

合探?

とめをおろかにすれば、ついにごふちもはなるほどに、このどをりをき、わけま
 して、どうぞわがつま主水どのに、いけんなされて白糸さんよ、せめてこの子が十に
 もならば、ちうや上ケづめなさりよとまよ、又はわたしがさられたあとで、おまへ女
 房ならんとすとも、どうぞ其うち主水どのに、さんどきたなら一度は上ケて、二度
 はいけんをして下さんせ、いへば白糸ことばにつまり、わしもつとめのみのうへなれ
 ば、女房持とはゆめさらしらぬ、ほんに今迄おん親親したが、さぞやにくかる、おは
 らがたとが、わしもこれから主水様にいけんしましよ、おかへりなされといふて白糸
 二かいへ上り、あとでお安、我家へかへりける、ついに白糸、主水にむかいおまへ女
 房に子供お二人、つれてわたしをたのみにまいる、願上ればな、おかへりなされ、い
 へば主水はにつことわらい、おいておくれや、ひさしいものと、ついに其日もいつ、
 致しヤンレ

しらいとくどきやんれぶし

新板白糸くどきやんれいぶし

つゝきあだもんく

〽までどサアエ、くらせどかへりもしない、おやす子供をあいてにいたし、も早其よもはや明ければ、まはしい方より、おつかい有りて、主水身持がふらちなゆへに、ふちもなにかもめし上ケらるゝ、あとでおやすは、とほうにくれて、しやんしかねて、とうわくいたし、ふちばなされて、ながらへおれば、ばかなたわけと、いわれるよりも、ぶしの女房じや、じがいをしよと、二人り子供をねかしてをいて、すゞりとり出し、すみすりながし、おつるなみだが、すゞりの水よ、なみだとどめて書おきかいて、白きもめんで我身をまいて、二人り子供のねたのをみれば、かわい〜で、こにひかサるゝおもひきるはをさかてに持て、ぐつとちがへじやへ、やへばのしたに、二人り子供は早めをさまし、三ツになる子は、乳首ちくみにすぎり、五つなる子は、せなかにすぎり、これさかゝさん、のふかゝさんと、おさな心で早なくばかり、主水それとは、ゆめさらしらぬ、女郎や、たちいで、ほろよいで、女房じらしのこうたでかへり、おもてぐ

ちより、今もどつたと、子供二人は、かけ出ながら、もうしとゝさん、おかへりなるか、なせかかゝさん、今日にてかぎり、ものもゆはづに一日およる、ほんに今日迄いたづらしたが、ぎよいはそむかぬ、のふとゝさまへ、とうぞわびして、くださりましと、きいて主水はおどろきいりて、あいのからかみさらりとあけて、みればおやすはちしおにそまり、おれの心のわるいがゆへに、じがいたかよ、ふびんなやつと、なみだながらに二りの子供、ひざにだきあげ、かわいやほどに、なにもしるまい、よくきけぼうや、はゝはこのよのいとまじやほどに、いへば子供は、しがいへすがり、もふしかゝさん、なせそうなつた、わしら二人はどふしませうと、なげく子供をふりすてをいて、だんなでらへといそいてゆきてヤンレ

〽改名サアエ、もろふて我家へかへり、あわれなるかや女ぼうのしがい、こもにつゝんで、せなかへおうて三ツなる子をまへにとかゝへ、五ツなる子にいはいをもたせ、いけばお寺でほうむりまする、せひもなく〜わがやへかへり、女房おやすがかきを

きみれば、あまりつとめのほうらつゆへに、ふちもちぎやうも、みなとりあがり、又は主水をもんせんばらい、よみて主水はぎやうてん致し、子供なくのをそのまゝおいて、いそぎゆくのは白糸方へ、これはおいでか主水様よ、したがこよいわおかへりなされ、いへば主水はものがたりして、ゑりにかけたる改名だして見せりや、白糸てにとり上げて、わしが心のわるいがゆへに、おやすさんのな、じがいをなさる、さればこれから、さんずの川もおやすさんのナ手を引ましょと、いへば主水はしばしととめわしとおまへとしんぢうしては、おやす様へのいゝわけたぬ、おまへしなすになからへさんせ、二り子供をせいじんさせて、ゑこう頼むの主水様と、いふて白糸一間へいりて、あまたほうばい、くしこうがいを、ゆづりものとして、女郎衆にやれば、いもど小はるがふしぎにおもい、これさあねさんどうしたわけと、今日にかぎりてゆづりをいだし、それにおかをもすくれもしない、いへば白糸よくきけ小はるヤンレイ、わしはサアエナわしはをさなきセツのとしに、人にうられて、今このさまで、つらいつとめも、

姝女

はや十二年つとめましたよ主水様へ、日頃三年こんしんしたが、こんどわしゆへごふちもはなれ、又は女房にじがいをされて、それにわたしがながらへおれば、おしよく女郎のいきじがたぬ、しんでいきじをたてねばならぬ、はやくそなたもみまゝになりてわしがためとて、こう花頼、いふて白糸一間へいりて口のうちでも、たゞくりこと、なみだながら、のふおやすさん、わしゆへこそいのちをすてる、さぞやおまへはむねんであるよ、しでの山べも、さんずの川も、ともにわたしがてお引ましょと、なむといふこへ心のさだめ、わつとゆふこへ、このよのわかれ、あまたほうばい、みなうちよりて、人になさけの白糸さんが、主水さんゆへ、いのちをすてる、のこりをしけども、ほうばいがわかれおしみてなげくもどふり、今は主水もせんかたなさに、しのびひそかに我家へかへり、子供二人りにゆづりをそへて、すぐにみのまゝ一間へいりて、かさねゝのみのあやまりに、我とわがみの一じやうたてる、子供二人りは、とりのこされて、にしもひかしもわきまへしらぬ、おさな心は、あはれナ物よ、あまた

しんぢうも有とはいへど、ぎりをはたてたりいきじをはたて、心有たる三人ともに、きくもあはれなはなしでござるヤンレイ

鈴木主水はヤンレイくどきの中で最も著名なものではあるが、先年も多少考査したもの、其の事實は一向に知れない、關根只誠老人の刑情死表目には、新宿橋本屋心中、お糸與右衛門、享和元年十二月廿一日とあり、俗要年代記にも享和元年鈴木主水心中とある、武江年表は嘉永五年の處で、

猿若町二丁目市村羽左衛門が芝居にて、享和の頃青山邊なる鈴木主水といふ武士、内藤新宿の賤妓白糸と俱に情死せしこと、俗謳に残りしを狂言にしくみ興行しけるが、殊の外繁昌しければ、俳優二代目坂東秀佳、内藤新宿北裏通成覺寺へ白糸が墳墓を營たり。

著者齋藤月岑は何に依つて享和の出來事と認められたのか、刑情死表目、俗要年代記と共に據がない、只だ武江年表は此の芝居は俗謠に残つた趣向なのを言明して居る、續歌舞伎年代記は、

嘉永五年三月三日市村座二番目(白糸主水)重樓閣の小夜衣……當狂言鏡山に、此節はやる替女のうた 鈴木主水と四ツ谷新宿妓樓橋本屋白糸といふ小うた取交仕組、六幕目橋本屋の場、しうか宿場女郎大出來、菊次郎主水女房大に評よし、鴻藏大工大出來、是より名を發す……扱内藤新宿の世界を芝居に仕組し事をきかず、此處を初めとするか、櫻田左交大出來也。

とある、明治になつてもゴゼは極つて鈴木主水といふ侍はアを唄つて居たが、當時としては流行唄なのであつた、それが檜舞臺の新狂言になつて大入大繁昌であつた、それは豊芥子の云ふ通り、芝居にしては新宿の世界といふのを初めて見せるのであつた爲めであらう。

成覺寺にある白糸の墓碑は武江年表にある通り、嘉永に秀佳の建てたものだ、此の

寺は投げ込みといつて、三の輪の淨閑寺が吉原の投げ込み寺であるやうに、新宿の死んだ娼婦を埋葬した、其の名の通りに屍を隠すまでのものだから、誰のにも墓碑などはない、それでも過去帳へは記載する筈だから、同寺に就いて一見を求めた、寺僧が是だと云つて指示した。

安永五年十月二十日

妙 榮 信 女 橋本屋藤兵衛妻 俗名お糸

是は娼婦ではない、橋本屋の女房だ、勿論飯盛女は俗名などを書いてなく、單に何屋内とのみ書いてある例だ。

成覺寺に石の地藏があつて、其の臺石に寛政十二年から文化十年までの、情死十二件の戒名が彫つてある、斯うした追善をすべき寺は他にないので見れば、これが十四年間の情死者の總數らしい、此の中に享和度のが三件ある、元年八月五日のと三年正月晦日のと男の戒名だけで女のがない、定めて女は死ななかつたのであらう。二年

十月十七日のは二人の戒名がある、二年では刑情死表目と合はない、何か無いかと注意したが遂に無効に了つた、青山の鈴木主水の舊宅といふものもあるが、是などは大笑ひの代物で、書き附ける氣にもなれまい、白糸主水の情死といふものを信認する材料がない。

石童丸がるかやくどき

上

へ過しサアエ、むかしのそのものがたり、國は紀州にその名も高き、みねに紫雲のたな
びきまして、高野山とてたうとい山よ、あはれなるかや石どう丸は、かゝるなんしよ
をたどくあゆみ、かほもしらざる父うへさまが、こゝのお山におはすと聞て、たづ
ねさまよゆくたにみちの、あとやさきなるゆん手はいわ間めてはあまのきて山おろ
し、ふどうの坂をば見あげてとふる、ふみもかよはぬまるきばしわたり、心ほそ道た
よりのつへで身をまかせゆくさきをとへど岩根のまつの木かげにうちかけてやすらひ
玉ふ、かとう左衛門しげうちさまは、髪をおろしてなをかるかやと、かへてぶつほう
修行のために、ちうやにかきらすこの山さかを、たどりゆくのもみなのものよのた

め、おやこきゑんか石どう丸は、そばにおもはずたちより玉ひ、まふし上ます御出家
様よ、こゝのおやまに今どうしんが、おはしますならおしへてたべと、聞てかるかや
ごほうのおほせ、きのふそつたも今どうしんよ、去年そつたも今どうしんよ、おのこ
尋るその人さんの、ぞくのなをいひたづねてよかるヤンレイたづねますのはちうへさ
まよ、われら二ツのそのとしわかれ、もとはつくしのまつらとうよ、かとう左衛門し
げうちさまと聞ておどろき、わがこであるか、すでにとりつきたまはらんものと思ふ
心をよふくしづめ、御佛前にちかいを立し事はこゝろぞとよそくしくも、としも
ゆかいではるくこゝへしたひ來りしその心ざし、まことちうへ聞たまふならさぞ
やうれしくとびたつやうに思ひ玉はん、さりとはまた此みやまのならひといふは、た
とへめぐりあふたればとて名のりあふことかつてならず、はやくこきやうへたちか
へられと、はゞご大事にかしづき玉へ、それがひとつのかうく也とおしへさとせば
石どう丸はくには、おうちにせめなやまされはへももろとも此ふもとまで父をたづね

てまいりしなれば道のつかれにわづらひましていのちあるうちちうへさまに一めあひたい見たいとなげきあはれなげと思はれ玉ひちのありかをごんじならばおしへ玉へとめにもつなみだおさへかねたるそのありさまを見るにかやこゝろのうちでわれがおやぞとなのらんものごもつたない師のいましめといふてはるくたづねてきたにしらぬかほなり見ぬかほなればふびんまさりてどふなるものとむねにせきくる血なみだをばこらへかねてぞ思はずわつと聲をたてゝぞなげかせ玉ふキャンレイ

下

なさけサアエ、ないかな、よのきやうがいは思ひ出すはさまぐかはる、われぼんぞくのむかしをすてゝ出家けんごで此とし月をおくる中にもわがつまや子はもはやことしはいくつになるとねんじゆくりてはその事ばかり思ふところをけふ此道でめぐりゝて我子にあふはよもや佛もそんなかる親子一世ときゝつたゆればたつた一トことも

のいひたいがたてしちかひはやぶりもされず、こゝであはれぬことならなをも、みらいゑいがうあうことならず、なんとしやうかどうしやうものとむねにむせびて心の内はなかぬかほうぞなほ又つらさキャンレイそれとサアエ、さとりて石どう丸はさやうおなげきなされしうへは、もしやあなたがちうへさまか、はやふおきかせくだされませとそでにすがればしげ氏さまはともにひかるゝおんあいゆへにすでにおやぞと心もみだれいまになのりてきかせんものと思ふ心をうしろの山の岩のかげより聲たからかに、きおんにうむいのちかひをわすれたまふまいぞと師のきやうくにせんごわすれしかるかやひじり、ゆめのここちにきこへしゆへにふつきがつきふりかへりみてまよひましたよ、あやまりましたこんしさんがいひつせごしよ、いづれわが子と思ひましようか、まこと師匠にめんぼくなしときたる衣の袖うちはらひおのふたづねるしげ氏どのはこゝのお山におはせしなされど諸國しゆきやう出させ玉ひ今は行ゑもしれざるほどにいそぎ下山し、はゝおや様の病氣かいほうめさるゝよかる聞て石どうなみだをなが

しなさないぞや、のうあさましやちよはお山におわしもせずにくるしれずき玉ふ也、われはともあれはうへさまがこがれしにでもなさりやうならばなんとしやうか、そればかりが私やかなしい御出家さまは人をたすけるやくめときけばあはれふびんとおぼされましてちよによりし人でもあらばとふぞあはせてくださりませとくどきかなしむ心のうちを思ひやられてかるかやひじりともにはりさく思ひをかくしふくさづゝみの薬をいだしこれ師匠が一萬度のごまをたかれてでうがうありしまことたうときめうやくなればはにもちひてかんびやうあれよ、其な道すじなんじよであればつかれあしではなか／＼ゆけず、こちらまいればはなさかといふて平地どうせん馬かごあり、いそぎお山をくだるがよいとこゝろづよくもやりければなみだながらに石どう丸はくすりちからにお願いたゞきてせひ／＼なく／＼わかれてかへる、みちにならずまよはぬやうに、あなたこなたのことこまやかにおしへながらもかるかや殿は心もとなさまたきづかひさ、ゑんに引るゝともづなゆへにみへつかくれつしたふてゆ

くヤンレイ

ヤンレイくどきは嘉永度に大流行を極めた、くどきといふ節は、謡曲から義太夫へ移した顯著な代物である、二百年來此の節が興へた聲曲の變化は相應に興味ある研究だらう、さうしてくどき節を中心としたものが發生して、最低級にもせよ頗る廣い領域を持つた唄ひ物になつたことを面白く思ふ、だがヤンレイくどきは機關節の寫しで、ヤレエお寺さんは駒込の吉祥寺といふ、あのヤレエの轉化らしい、それに大體の節廻しから考へても、或は機關くどきといふべきものなのかも知れぬ、明治の初めまでも、トヂとエトヂなアラエ、抜けうらだエなど、機關節で俚謡を唄ふのも珍らしくなかつた。

平井權八小紫くどき

上

こゝにサアエ、過にし其物がたり、國は中國その名も高き、武家の家老に一人のせがれ、平井權八直則こそは、犬のけんくわが意こんとなりて、同じ家中の本庄氏をうつて立のき、あづまをさしてくだる道にて桑名のわたし、わづか斗りの舟ちんゆへに、數多のせんどうにとりかこまれて、すでにあやうきその折からに、これを見かねて一人の旅人、平井助けてわが家へ連る、是は名におふ東海道に其名熊たか山ぞくなるが夫と權八夢さらしらず、其家うちには美人がござる、名をば龜菊つぼみの花よ、見れば見る程おとなしやかで、其夜權八が寢間に忍び、申若さん侍さんよ、此家主はとうぞくなるよ、しつて泊るやしらすで有か、今宵お命あやふござる、わしも三河の富家

のむすめ、こその暮から此家へ取れ、ながの月日を涙で暮す、古郷戀しやさぞ兩親さんも、あんじさんすで有ふと思ふ、おまへ見かけてお頼申、どうぞ情じや後生じや程に、わしをつれ立、此家をにげて、古郷三河へおくりてたへと、くどき立られ權八こそは、さすがよしある侍なれば、そのサ譯がら残らずきいて、さらば此家の主を初め、手下とうぞく皆切ころし、おまへ古郷へつれ行申、二人ひそかにやくそくかため、むすめ龜菊立出ゆきやるヤンレイへそれとサアエ、しらずに熊たか殿は、手下數多にさゝやきけるは、こよひとめたる若侍は、腰にさしたる二腰こそは、金作りで名作ものよ二百兩から先へのものじや、彼をあざむき連來りしは、夫をうばはん心の工み、奥の座敷へねかして置た、もはや時刻も夜半の頃よ、奥の一と間に切込ければ、兼て權八心得あれば、夫と平井はぬく手も見せず、主熊たか手下のやつら、終に残らず皆きり殺し、そこで龜菊手を引連て、なれし三州の矢はぎの長者に來り、一ぶしゅうのはなしをいたす、長者夫婦は悦びいさみ、どふぞわがやのむこにもせんとすゝめけれども

権八どのは、なほも仕官の望みで有ば長者夫婦にことわり云て、暇乞して立んとすれ
ば、今は龜菊せんかた涙せひもなく、金とりだして、心ばかりのはなむけなりと、
いへば権八きのどくがほを、こゝろざしとていたゞきおさめ、花のあづまへ急がれま
する、行ばほどなく川崎宿のおとに聞へし萬年やとて、こゝにしばらくお休なさる、
さてもこれから品川までの道は何里とおたづねなさる、道はわづかに二里ほどあれど
鈴が森とてなんじよがござる、夜ごとくの辻ざりあれば、七ツ過にもはやなりけれ
ば今宵當所へおとまりあれと、いへど権八みゝにもいれず大小さす身はそれしきごと
に、おそれとまらばあまたの人に、おくびやうみれんのさむらひなりと、ながくわら
はれちゞよくのたねよ、それはもとより望みでござる、勇すゝんで品川さして行や
るヤンレイ

下

さてもサアエ、平井権八殿と同じ茶やにて休んでゐたる、花の東に其名も高き男達に
て幡隨長兵衛、平井出て行跡見おくりて、さすが侍あつばれ者よ、さらば若衆の手な
みをみると、跡につゞいて長兵衛こそは、鈴が森へとはやきしかゝる、其やばしよに
て権八こそは、兼てかくごと山ぞく共を、大せい相手に火花をちらし、夫と見るより
幡隨長兵衛、されば助太刀いたさんものと、げにや仁王のあれたるごとく、切て廻れ
ば山ぞく共は、雲を霞と逃行跡で、其や長兵衛は平井に向ひ、おとし若にも似合ぬ手
並、恐れ入たる働きなるよ、わしも江戸にて名をうる男、お世わいたさん我やへござ
れ、いへば権八悦び入てさらば今より兄弟分と、有ば長兵衛かくまひなさる、偕も助
七助八達は親を討れた其仇がたき、平井権八打果さんと、是も東の花川戸にて借家住
居で二人の者は、花のお江戸を日ごとに尋ね、夫と権八早くもさとり忍びねらつて二
人の者を、なんの苦もなく殺して仕廻、今は権八あんの思ひ、心ゆるみし若げのい
たり、花のお江戸の新吉原に、音に聞へし花扇やの小紫にぞ心をかけて、夜ごと日ご

とお通ひなさる、此や小紫せうを聞ば、三州矢はぎの長者が娘、今は長者もおちぶれ果て、むすめ龜菊遊女にうられ、涙ながらに勤をいたす、平井權八夫とはしらす初會ざしきのそのはじまりに、どうか見たかほつきなりと、思ふ心が先へもつうじ、いつそかはゆいお若衆さんと、思ふざしきもはや引過て、床に成たる其むつごとにヤンレイへさてもサアエ、たがいに顔見あはせて、思ひついたるいせん、さてはかめ菊、權八さんか一どわかれて、又あふ事は、先の世からの約束ごとよ、二世も三世も其先迄もかはるまいとの互のちぎり、夫が悪事のおこりとなりて、人を殺して金取ことが夜ごと日ごとに、度かさなれば、どくをくらへば皿でもなりと、猶もつのりて中山道の音に聞へし熊谷土手で、上州縞うり彌市を殺し百兩あまりの金子をとりて、猶もくろはへ忍んで通ふ、あくじ千里で權八身分、そのやゑすがたお尋者よ、こゝに目黒のこむ僧寺に、忍び入ともきびしいせんぎ、今は天地に身の置所なくもなかれず、かくごを定めお奉行さまへとなのつて出る、あはれなるかや權八ことは、鈴が森にてお仕

置となる、さても幡隨長兵衛こそは、平井權八さらした首を、ねがびもらひて目ぐる寺へ埋ほうむりゑかうなさる、そのや。

ヤンレイくどきの一般型式を見せるまでだが、その組立て方が説經祭文に習つた様子子を隠し難い、舞臺のものでもなく、御坐敷のものでもない以上、大道としては、説經祭文は親分株のものであるから、それに追隨したい氣持のあるのも無理ではない。

小栗判官照手姫くどき

上

さうどサアエ、ばなしや、心中くどき、せじやう、せかいにかづある中に、みやこ九條に其名も高き小栗判官まさ清さまは、日々につとめる大内御所の、あまたつめたるくげしゆの中で、花もあざむくびなんでござる、ころは卯月の卯のはなざかり、ある日小ぐりは花見に出て、花見がへりの其道すがら、さけのきげんで、みぞろがいけのそばの木のねにこしうちかけて、ふへをとりだしふきこむねいろ、天につうじて、ちにしみわたり、いけの大じやも其のねにうかれ、娘すがたとかたちをかへて、いつかそろく小栗のそばへ、よればたがいにかほ見合て、これもいんねんづくではあるが、ついに其ばでちぎりをこめる、これがのちく小栗がために、あだとなるとはゆ

めさらしらすヤンレイ[〜]さてもサアエ、小栗は大じやとちぎる、其やとがにてひたちのくにへ、親のなさけでとのばらつれて、なごりおしくも都を出て、せひもなくくひたちのはい所、玉の御てんにほうでうづくり、こゝにかんきよの身分となれり、それはさておき、さがみの國にごうどう切^{きり}とり、よこ山どの、おやこ四人はあく心ものよ、京に名だかきてるてのひめをぬすみうばうて、わがやへいれて、これを悴^{せがれ}にめあはずしよぞん、今はてるても十九となりて、一人りつくくしあんをいたし、たとへ命がなければとても、このやひどうのあくたうの悴、なんのまくらがかはさりよものと思ひつめたる心の内は、さすがまれなる女でござるヤンレイ[〜]ある日サアエ、小ぐりの御てんへ来る、さがみまはりの小間物うりが、さがみよこ山てるてのはなし、きいて小ぐりはふみしたゝめて、いろの取もち五藤にたのむ、すぐに五藤は其ばをたちて、さがみてるてにふみさしだせば、ふうじひらいてるての姫は、あいも見もせぬ、こひぢのふみを、さすが五藤のりにつまされて、かへりへんじに一しゆのうたをかいたたん

ざく五藤へやれば、道をいそいで小ぐりにわたす、うたの心もくもらぬて、十人あまりのとのばらつれて、てるてかたへとおし入むこに、國はさがみのかまくら通り、おとにきにへしよこ山どのの、それときより悪人ンおやこ、たくみおいたる鬼かけ馬の、手なみ見てからむこにもしよと、きいて小ぐりはしたくをいたし、すぐに馬やへあんないさせる、そのや馬やは岩むろづくりヤンレイヤンレイさてもサアエ、おそろし岩やの内、とらをあざむく鬼かげなれど、さすが小ぐりは、くげしゆのながれ、三にぶじゆつも達人なれば、馬をなだめてすらりと乗て、馬の上にて、ふげいのおそび、月もてるてとはれてのふうふ、おやのよこ山たくみもはづれ、さらばしうげんさせやうもの、酒やさかなをととのへならべ、小ぐりとのばら、どく酒としらで、のめばちをばく、其くるしみは、みるも中々あはれなことよ、小栗一人りはふち澤寺へ、馬をはやめてかけつきなざる、寺の和尚おしやうがし人をもらひ、あしや、や薬でかいはいういたす、こゝにあはれやてるての姫は、親のおほせにうつろのふねで、しかも其日は四月の廿日、ゆられ流され行先しれず、あはぬつらさのかづさの國のはまへついたが五月の二日、これを見つげるすなどりせん頭、むつの濱にて、てるての姫を船の中から、てを引つれて、すぐにわがやへおともをいたし、内のものにも一々咄し、あしやや薬でかいはいういたす、月日おくれれば宿なる女房、いつかりんきの心がおこる、やんれい。

ヤンレイくどきは安政あんせいになつて、説經せつきやうや祭文さいもんからの傳來物でんらいものの小栗判官おぐりはんぐわんだとか、石童丸いしどうまるだとかいふ古臭ふるくさいのを轉てんじて、現代物げんだいものを題材だいざいにした、もつとも其その前に芝居しばいでお馴染なじみのお三茂兵衛おさんべゑやお俊傳兵衛しゅんでんべゑなどの類るいを採擇さいたくした、それに心中物ちゆうしんものが多おほかつた爲ためもあらうが、新あたらしいくどきは殆ほとんど心中物しんぢゆうものであつた、従したがつて特徴とくちゆうのヤンレイを棄すてた譯わけでもないのに、従來じゆうらいのヤンレイくどきを心中しんぢゆうくどきと改名かいいいした、それから間まもなく心中節しんぢゆうぶしと呼ばれて明治めいじの中頃なかくらまで行おこなはれた。

新ばんおしゆん傳兵衛くどき

上

あめのサアエ、ふる夜は、ひとしほゆかし、さてもおしゆんがころのあんじ、きのふあきは傳兵へさんが、いひなさんしたことばきくに、せきをやぶりしそのとがにんは、わしがためにはだいじのおしゆう、どこにどうしておるでなさるか、たとへこのみをかはりてなりと、すくいまうしてあげたいころ、ゆへにきのふは傳兵衛さんへ、ころにもあいそをつかし、さぞやおはらがたたしやんしたろ、とうぞかんにんしてくださいんせ、まゝにならぬが、うきよのぎりトひざにしぐれのおとさへ見えて、むかふかぢみにころもくもる、けしやう水さへなみだのあめに、ふちもこゆべきおもひのまして、そらもおぼろに身にしみわたる、かねはうへのか、むすびしるんのも

ぎるなかさへあさくさなるか、ころに傳兵へは、おしゆんがむねをさとりかねてや、わが家を出て、しのぶすがたにたゝすむのきも、よるはあらしのはなかはどなる、なれしくどりもしかすかなれや、たしかころぞとをうちたゝき、これさおしゆんよ、ころあけてたも、きいておしゆんは傳兵へさんか、こちへござんせ、おまへはなんで、なんのようじで來やさんしたトいはれ傳兵へははらたちがほで、なんにきたとはがてんがゆかぬ、きのふあきはのそぶりといふは、あいそづかしか、どういふわけと、きくにおしゆんは、そらうそふいて、わしがむねよりおまへのころ、せきをやぶりしそのをのまへを、たづねいだして、どうすること、いへばでんべゑ、そりやしたること、せきをこへたるとがにんなれば、こよひちうにもたづねていだし、くびをうたねば、このでんべゑが、ねがいかなはぬ、それじやによつて、くさをわけてもせんぎをするが、それをおぬしにいふたるとても、なんのたしにもならざること、きいておしゆんは、とどろくむねを、きはめながらに、それさへきけば、ほかになんにもま

うありません、はやふかへつてくだりませと、あいそづかしをきくより傳兵へ、せいてせきたつむねをししづめ、おもひなほして、おしゆんにもたれ、をなごごころのうたがひふかい、ふかいふたりがこのなか／＼を、たとへみづきすひとあるととも、二世もさんせもいひかはせしをほぐにするきで、そなたはそはぬころなるかと引よせければ、おゆしんなみだにこへうるまして、たとへかはせしことあるととも、わたしやおまへにあいそがつきた、はやうきれぶみか／＼しやんせへと、しさいありげなことばのはしにさらばきれぶみつかはすべしと、すどり引よせするすみさへもうすきるにしとあきらめながら、かくもつれなきころとしらで、かはすまくらにアノとりかねをうらみつらみも、みなあだあらし、ひとのころとあすかのかはと、ふるきたとへもわが身のうへと、思ふものからまゐらせそろも、あとやさきなるころにうらみ、やがてした／＼めおしゆんにむかひ、さらばのぞみのきれふみわたす、これがこのよのなごりじやぞよと、そとへいづればはやふけわたりさとの碇のおとさへゆかしヤンレエ。

下

そのやサアエ、おしんはあと見おくりて、かはるころをさぞうらめしく、ふがいない身とおもはんしようが、いふにいはいれぬこのみのねがひ、あいそづかしもおしゆうのためと、むねになみだをおしいれあけて、いせんしのびしそのをのまへと、なにかさ／＼やく、そのことさへも、ひとやきくともしらふぢげんだ、のれんくどりていり来るゆへに、見つけられじと、ふすまをはたとしめる手もとを、さとりし源太、わざとおしゆんにしなだれか／＼り、さてもうつくし此あいきやうで、あのや傳兵へとち／＼くりあふて、きくもころがにへたつ様と、きいておしゆんは、うらむるいろに、じつとながめて、げんだにむかひ、きのふあきはでいふたることを、おまへどうしてくださんすると、きいてげんだは、これそのやうに、わしをこまらせ、なにすることじや、さてもそなたはでんべゑどのと二世もちかふたなかではないか、ひとをなぶるもおい

たがよいといふに、おしゆんは、きれぶみだして、そのやでんへゑとこれこのやうに、
きれてしまふたしやうことだすを、げんだ手にとりつくづくながめ、さてはよめたと
しりひきからげ、わしがかはりて、とだなのうちをせんぎなさんと、たちあがりしを、
あれさまたんせ、そりやあんまりと、とめるおしゆんをつきのけながら、しら^はたづ
さへ、ゆかんとするを、とつてひきすへ、こゑくもらして、それはすげない、こりや
どうよくじや、いかにせきとりさんじやといふて、ちからばかりか、こゝろをまでが、
なせかそのよにきづよいものぞ、ほんにすまふのうはさにさへも、手^てとりくとき、
なれそめておもひわすれぬわたしがこゝろ、いふてしまだのもつれし髪^{かみ}を、とりもあ
がらぬ、このあだぼれば、ほんにをなごのみちたつものか、たとへにくくもいちやの
まくら、なげのなさけにかはしてたもれ、やいのくとかほをばかくす、ふかきおも
ひは、さくらのあめにぬれていろますふせいもこれにやおよびもあらざりければ、そ
のやげんだはこゝろのうちに、さてもちうぎなこのあだざくら、實さへむすばで、ち

らすといふは、いともふびんなことにはあれど、二世^せとやくせしをとこときれて、し
ゆうのいのちにかはらうといふは、じつにめでたきをなごのかみ、さらばおしゆん
がのぞみにまかせ、まくらかはしてみがはりさせん、さうちやくくと、うなづきな
ら、さてもそなたが、そのしんじつに我をこれほどおもふてくれる、そのやこゝろの
あつばれなれば、そちがねがひをかなひてやると、きいておしゆんは、さもうれしそ
うに、なみだはらひて、より^{つき}付けければ、ともにげんだは心もとけて、さてもをなごに
まれなるちうぎ、戀^{こひ}と忠^{ちゅう}ぎに、いのちのおびもとけて、びやうぶに思ひぞ残るヤンレイ
エ。

是^{これ}は説^{せつ}經^{きやう}祭^{さい}文^{もん}からでなく、富^{とみ}本^{ほん}の身^み替^がお俊^{しゅん}から取^とつたのらしい、従^{したが}つてお芝^{しば}居^い模^も樣^{やう}
でもあり、斯^かうした方^{ほう}から、瓦^{かわ}板^{ばん}の文^{もん}句^くの向^{かう}上^{じやう}が目^め立^だつ。ても來^くる。

中山道越後くどき

こんどサアエ、しんぱんなかせんどうの、木そのどうちうこいちにたとへ、おゑど
 日本橋^二 手にてをとりて、わたる 板橋^二、あいやいがさで、人が^{ひと} はら
 び^{半一} と うらは^{十一} をこへて、ふたりはなしの 大みや^一 ならば、しかも
 ひかわのみやうじんさまへ、かけたごがんも あげを^{丁卅} のしゆくよ、よくもあわ
 せし おけ川^{卅丁} ならば、 かうのす^四 鳥^{とり}のはなれぬやうに、人の^{ひと} くまがへ^二
 深や^{廿九} となれば、わしがこゝろも 本庄^二 たて、しんのはなしも
 しん^{半一} ならば、ひとめしのんで くらがの^{半一} しゆくよ、あだなうきな^の た
 かさき^{卅丁} ならば、ひとはなしをきく いたはな^{丁卅} で、 あんなか^{半一} こゝろの
 わしやほれこんで、せたいもつのを まつへだ^{半二} しゆくよ、せきをこへても さか

本^{八丁} までも、わしとおまへの氣は かるい澤、こまもいさむやくつか^{卅一} な
 れば、こゝがしあんの おいわけ^{十一} しゆくよ、はやく 小田井^七 でたのしみ
 たいと、あさなゆふなも 岩村田^{半一} にて、はなし しほなた^{二十} やはた^{三十} を
 こへて、うりやうとうげのめいぶつなれば、ちや屋^やでもち月^八 そのふうぞくは、
 すがたやさしき あしだ^八 をはいて、ひくいせいなら なくぼり^二 みせて、わ
 だ^五 とゆくにはそりや 下のすは^三、こゝになだかききやうがはらよ、あまきか
 らきの しほじり^二 こせ は^{丁卅} おもふこいちのはや 本山^一 よ、にせ
 のかための なるがは^{半一} ならば、手なべさげるもうきよの ならい^{半一}、みちの
 やぶはら^二 すごくゆけば、 宮のこし^{半一} からかせ ふくしま^{半一} で、かほを あ
 げ松^九 よくくみれば、 すはら^{廿二} ならべて のじり^{半二} をこへて、いき
 なはなしも みの^{半一} うちと、 つまごり^二 まごめ^五 の おち合^九 は
 なし、ひとのこゝろもよい 中つ川^{半二} 大井^{半三} をいと、そでつまひいて、

はなすはなしも **大**くて **一**丁 **一**ならぬ、みちの **ほ**そくて **二** **み**
たけりー **一**さんから **ふ**しみ **二** **を**みれば、きそでなだかき **お**ゝ **田**り **二** **の**わたし、
 ふねをあがりて **う** **沼**りー **が**ござる、このねがひも **か**の **ふ**りー **の**しくよ、ど
 うか **こ**ふと **り**ー **た**のしみみれば、みへつかくれつ **み**へ **じ**り **二** **の**しゆくで、み
 つけられたらかほ **赤** **坂**りー **よ**、いつもかはらぬ **た**る **井**りー **の**しゆくで、こ
 ろいきせきはや **關**がはらりー **ね**ものがたりは **い**まつりー **の**しゆくよ、ひと
 つふとんでそりや **柏** **原**りー **ゆ**めの **さ**めがい **丁** **二** **は**んばとなれば、おもふほ
 そみちはや **鳥**い **本**りー **人**がわらをとそりや **高** **宮** **二** **と**、おもひこんだる
 ふたりのなかは、ふかい **ゑ**ち **川**り **二** **は**やうちわたり、今はたがいそりや **む**さ
り **三** **の**しく、**雨**ももらさぬ **も**り **山**りー **な**れば、**草** **つ**り **三** **ふ**みわけわしやはる
 くと、のぼりつめたる **大** **津**り **三** **の**しゆくで、**京** **ぞ**うれしやふたりのこゝ
 ろヤンレエ。

明治にも鐵道唱歌が流行した、江戸時代にも其の手を往つたものが多い、手習のお
 手本にも『都路』などがあつた、即ちヤンレエもお出なすつた譯である。

新板お吉清三しんぢうくどき

「こんどサアエ、あはれなしんじうばなし、くには京都にその名もたかきいとや與右衛門うとくなくらし、見せもにぎやか、くらしもはんじやう、一人むすめにお吉といふて、としは十六、いまさくはなよ、見せのばんとうに清三といふて、としは二十二で、をとこのさかり、きれうよければ、お吉がみそめ、かやうくがたひかさなれば、おやのみみへもそろくはいり、これをきいては、まゝにはならぬ、そこでお吉をひとまへよんで、みせの清三とわけあるそうな、おもひきるきかきらぬかお吉、これさかゝさんなにいはさんす、わしと清三と、そのなかくは、すみとかみとのしみたがなかよ、何がなんでもはなれはしない、おくのト間へ清三をよんで、そちをよぶのはべつぎしやないが、うちの娘のよいきをはらし、それをきいては、おかれはしない、

しもてゆかんせけふかぎり、じたい清三は大きかうまれ、ものもいはずに、たゞはいくくと、うちへかへりて、四五日たつとお吉おもふて、びやうきとなりて、せひもかなはぬあひはてました、お吉とろくねむりし所へ、ゆめかうつか、清三がすがたまくらもとへとあらはれました、そこでお吉は、ふとめをさまし、みれば清三がすがたはみへず、さらば是から清三がかたへ、おやの手もとへしのでゆきやるヤンレイ（ぎざいへサアエ、はいれば、ふなばがござる、ふねにやのらんで、おかちをゆきやる、いそぐぼとなく大坂まちよ、清三やかたは、どこかときけば、はしのもとより三げんめでござる、清三やかたのまへにとなれば、かさをかたてにこしをばかゞめ、ごめんなされとこしうちかけて、清三やかたはこゝかときけば、ものあはれや、清三がは、じゆずをかたてにたゞなきながら、わかい女ちうはどれがらござる、わたしやきやうとのいとやの娘、清三さんにはわけあるゆへに、とをいところをたづねて来たよ、どうぞ清三さんにあはせておくれ、そちのたづねる清三ははてた、けふは清三が七日

でござる、きいてお吉はたゞなくばかり、さらばこれから、はかしよへまいり、たてたとうばにすがりてなければ、ひとのおもひはおそろしものよ、清三はかしよはふたつにわれて、そこへ清三があらはれいで、そこへきたのはお吉じやないか、とをいところをよくきてくれた、お吉なくなよ、ないたるとても、どうでこの世で、そはれはすまい、わしをおもはど、かうはなたて、きたるめい日回向をたのむ、といふて清三がすがたはきへる、これさまたしやれ、これまたさんせ、そなたばかりはひとりはやらん、わしも一所にゆかねばならぬ、てらの大もん四五ちやうはなれ、小さいひろふてたもとへいれて、まへのおほりへ身をすてまするヤンレイ。

心中節しんぢうせつと云いはれるやうになつたのは、此こゝの冒頭ぼうとうの『こんどサアエ、あはれなしんじうはなし』といふ、是これが極きまりで先さきに唄うたひ出だされる、同おなじ現代物げんだいものの新あたしいにしても、お約束やくそくの『こんどサア』が附ついて居かない、附ついて居かないのが、附ついて居かるのよりも新あたしいと睨にらんだ。

新板しんぢうくどきぶし

上

〽月にサアエ、むらくも、はなにはあらし、ちりてはかなきこのよのふせい、こゝにあはれなしんぢうばなし、くには下サしもふかどりのこふりやはぎむらにて、その名もたかき、ごんのじようとてたいたかもちよ、そのやよふしに常吉といふて、としは四十五で、ふんべつざかり、なれどうきよのこゑじにまよひ、國はどうごくうなかみごうり、てうしうまれのおとくとゆふて、としは三十二にはやちかけれど、こゑのふちせと、みやまのはなは、ひとのしらなひいろかをもちて、かせのたよりで、ついみそめあい、こゝろづくしにかさなるつきひ、さてもすぎにしこのふたとせは、ぬしに〽あをひのはなつやみそめ、こゑのふちせにわしや〽山ぶきの、いろとおもへど、うきよのはなが、

〽ひとへさくらのおもへをぬしに、かけしくさやにしだる〽ふじの、ゑんをむすんで、わしやそばのはな、どふぞねがへをいろよきことに、へんじ〽しら菊たよりはきぎく、さいてみたさのむねやゑぎくよ、〽ぼたんふよふや、せけんのものに、〽つゝじされても、そわづにをこか、どうせはぐちにのる〽あさがをの、はながしほる〽わたしがこゝろヤンレイ〽そこでサアエ、つまこはしあんをきわめ、あるひわがつまつねきちにむかひ、これさ常さん、よふきかさんせ、おまへこのころ心ろがまよひ、内のしごととはさてすてをいて、なにかせけんによきはなあるか、またはつまこにくしみあるか、なにかよふすのしれないことよ、すゞきもんどてわしやなけれども、すへはどうする常吉さんよ、おまへ身ぶんはやくぎてないか、村のひとにもいけんをゆふて、親にこふこう忠ぎのみちを、ひとにおしゑるそなたのみぶん、うわきごととはさてわからない、うちのつまこはかはゑくないか、かわゑつまこをとうして。

下

くれる、はやくそのことへんとうさんせ、そこで常吉こゝろの内は、きもにはりさし、くぎうつごとく、なんぼきづよきをとこであれど、ぎりとちうぎにせめふせられて、つまこてまへもはづかしそうに、しあんかたなく、そのばをたちて、ぎりの二のじで足ふらくと、いでてゆくこそさてあはれなりヤンレイ。

〽ゆけばサアエ、おとくはうれしさあまり、これさ常さんよふきなました、おまゑくるのをまちかねました、つもるはなしは、うみ山ほどに、さてもこのごろせけんのはさ、おもへよらざるはなしとみゆる、おまへわたしをこうしておけば、うちのつまこにいゝわけたゝぬ、わしをあきらめひまくださんせ、どうぞそうしてわたしをさきへ、めいどはなむけしてくださいさんせ、こいのふかせのぎりすてことば、そこで常吉かねてのよふひ、どうせこうなるゑんづくなれば、しんでみらひでそいとげよふと、ふたり

やみじをさんづの川を、ともにてをひきわたらんものと、ながきうきよにみじかいのち、こゝろさだめてなむあみだぶつ、たつたひとこゑこのよのわかれ、それとみるよりはやとりついて、いかゞしたことどうしたわけよ、さらにへんじもなきことなれば、むらのやくばいこのこととどけ、とどけますればむらのやくにんはすぐになちよ、そのばい入てよふすのこらず、かきつけいたし、すぐにそのまゝごけんしねがひ、ねがひあければおたづねござる、よふすのこらずかきあげまする、すぐにごけんしをくだりありて、きづしよくをあらためすめば、そのやしがひをぼだいしよ寺ゑ、ふたりいつしよにひきわたされて、そのやはか所にはふむりまする、せけんしんぢうあゝるその中にはまれがたなきしんぢうでござるヤンレイ。

新しい出来事あたらしできごとを採用さいようしたものだが、假作かきくではあるまいと思ふ、別段べつだん變つたものでもないが、ヤンレイくどきと呼ぶ例れいを破つて、心中しんぢうくどきとした處ところが注意ちういされる、此等これらか

ら心中しんぢう節せつといふやうになつて往くのであらう。

此の文句もんくの中に村役場むらやくばといふ言葉ことばがあるのを見ると、東京とうきやうになつてから作られたのこも知れぬ、江戸時代えどじだいには決して無い言葉ことばである、我等われらは故老こらうから屢々しほく聞いて居る、明治めいぢも十年前ねんぜん後までは江戸其の儘まであつたと、さうすれば此等これらの文句もんくも殊更ことさらに江戸めかしく書いたのではなく、實際じつさいに斯うした様子やうすであつたのだらう。

湯本心中くどき

上

戀のサアエ、おもにを身に奥州や、岩城ならねばゆきゝの人が、あしをとゝむるゆもとの宿に、さてもあわれな心中ばなし、男いづくと尋てきけば、生れこきやうはるちごのしばた、酒やとうじで其なは政次、いとけなきよりくにをばいで、こゝやかしこにとし月常陸、水戸え來りてしばしの間、足をとどめていつとせあまり、去年の七月みとをば立て、いづくあて共みは定めなき、心大津や平瀉濱をよそにみなして、名こそ其の關にちるやさくらの入あいちかき、やどりいそげば心も關田上遠野しるしのにしき木ならで、みちの久保田に氷りし水の、とけてわかれてすへ大嶋に、ながれゆくのはわがみの植田、つゞく新田ゆながやこへて、弓手はるかにあふげばたかき、夕日ま

ばゆく赤井のたけを、よそにみなして湯本の宿に、やどりもとめる鞠屋の二かい、これもたびぢのうさばらしかよ、ひとつ二ツとかさねし酒の、かづもつもりてほろよひきげん、あいてほしやのなぞかけことば、それとばんとうさし心得て、いだすあいてはこのやの小梅、としは二八のつぼみのはなも、ひらくあいきやうこぼるゝばかり、客をそらさぬそのとりなりに、そこで政次もつひはまりこみ、けふもあすもといつゞけすれば、かねてみじかきろよふもつきて、今はせんかたなくゝわかれ、小名のはまにてしるべをもとめ、酒やはたらきするその内も、わすれかねたる小梅がすがた、まがなすきがなゆもとの宿へ、かよふゝがたびかさなりて、すへは主人のかわせのかねや、ともこほふばいみなかりつくし、人のおもわく主人のしゆびも、あしくなりゆくみのふしあわせ、主人かたよりいとまもいで、何とせんかた渚のふねの、つなぎとまらぬ心のこまや、つとめするみも戀じのみちは、おなし思ひの小梅が心、しよてはつとめであいそめたれど、末はたがひにつひふかくなり、くしやかうがいかなざ

し迄も、みんな政次にいれあげまして、外の客をもそまつにすれば、これも同じくおへやえふしゆび、すどのいけんもそらふくかせよ、せけばせくほどつのが戀じ、むりなしゆびして揚やの二かい、忍びあふよのむつごとさへも、もれて聞ゆるおへやのみ、に、迎も只ではやむまいほどに、ことのなき内くらがへさんせ、なれどことしはよじつもあらず、一夜あけなばそふだんせんと、ないしよばなしをきゝとる小梅、かねてかくごもまたいまさらに、きけばおどろくわがむねのうちヤンレイ。

奥しういわき湯本驛しん中くどき

下

いち夜サアエ、あくればげにあら玉の、はるをむかへてみないへごとに、のきにしめなわかど松がへや、ひいふみイヨウとつくばねよりも、おちてながれてこいじのふち

の、ふかくなりゆく小むめに政次、ころは正月三日のよひに、むりなしゆびして、うちをばいで、あがるみやうがよ、二人のあふ瀬びようぶたてきり、ひそくこゑに申政さんよふきかしやんせ、わしとおまへと二人りが中は、としはちがへとどふしたるんか、ほんにかたときゆめわすられぬ、それに今では主人にせかれ、かくれあふよは人目の關を、しのびしのでたまさかあへど、今はこの事主人へしれて、もはやくらがへいづくのはてか、しらぬたこくでうきかんなも、つらゐつとめもいとひはせねど、ぬしにあわぬがわしやかなしいと、涙かたてになきゐる小梅、きいてみもよもあらぬ政次、ほんにそなたがいまいとほり、年のちがひし二人が中は、すぐせいかなるあくえんやらん、またはいづものかみくさまが、むりにむすびしゑにしかしられず、とてもこのすへあふせもならず、つれてのくにはかよわきそなた、おつてかけら引もどされて、つらゐせめくにみをせめられて、いきてうきはぢさらさんよりは、しぬがましよとたゝ一すじに、おもひつめたるおとこのころ、きいて小むめはかほふ

りあげて、とてもながらへそひとげぬみの、しぬはもとよりかくごのわたし、ぬしはこのよにいきながらへて、おもいだすたびたゞ一ぺんの、ゑかうたむけをしてくださいんせ、たのみますると小むめがことば、さてはそなたもかくごであるか、どふでしぬならさんづのかわも、よもつひらさか手をひきあふて、ながきみらいでそふのがたのみ、さらばこれからしたくをせんと、心いそぐもしにがみとやら、すでにそのよもはやふけわたり、たにの水おととふ山でらの、かねもかすかにむじやうを告る、あわれはかなき二人りのものは、にしに向ひて兩手を合せ、こゑもしづかに妙なる御法、かみに一しゆのじせひをのこし、筆の命げみじかきうきよ、夢とくらして三十九年 梅のこずゑは十七とせの、はるはくれどもむじやうのかせと、ともにちりゆく小むすめがさいご、かへす刃やいばにそのみもじかい、二人りもろともゆもとの宿に、ながすうき名をゆききの人が、かたりつたへを又きゝつたへ書かくもあわれな心中ばなしヤンレイ。

最も念入りに新出来事を採擇した處が身上ではあるものゝ、事實は保證の限りでない、だが上巻の表紙に安政三辰正月三日と確定日付したり、下巻には十七歳小梅、三十九歳政次と當人共の年齢を標記したりしてある。又た三途の川は極り文句であるが、よもつひら坂は流石に時勢で斯うしたものにまで平田篤胤流行の飛沫を止めたのが面白い。

江戸大火ぢしんくどき

上

〽およそサアエ、日本六十よしう、世かいひらけて、かしまのかみのすへたかんじんかなめの石も、ときとじせつは、さてせひもなや、ころは安政二ツのとしの、かみはいづものおるすをめぐけ、大地八萬ならくのそこに、いけたなまづのまたうごめきて、いかりてひどき、こんどの地しん、よるの四ツ時、にわかさはぎ、お江戸三千六百余町、四里と四ほうをみなゆりくづし、どことかぎりは、あらおそろしや、北はせんじゆに、又小づか原、西はしんじゆく、いたばしかけて、東ふなばし、南の方は、このみなどのしな川までも、残るかたなき地しんのさはぎ、老もわかきもたゞいちどうに、火事よ地しんといふ間もあらで、天地しんどう風なまぐさく、すなをふきあげ、

小石をふらし、神社ぶつかく堂みやがらん、のきをならべし、そのいへくらは、こなのごとくにみなとびちりて、くづれかさなるおとすさまじく、みぎよひだりとにげゆく人は、おやをうしなひ、つま子にわかれ、にげるさきさへあらなさけなや、はりにうたれてかしらをください、かべにうづもれ身ばねをおられ、まなことびだし、血へどをはいて、死ぬるいまはの身はほとゝぎす、こゑもかれ野になくむしよりも、ほそきいのちや、あさ日のしもと、きへてゆくみのかなしさこはさ、くずれやけたるそのまぢかすを、こゝにあらましかぞへて見れば、花のくるわのよしはらかけて、さんや田中に田まちをはじめ、人の山なす、その山のしゆく、これはどふせふ聖でん町に、しばゐ三丁、火の花川戸、つみもあさくさきんりう山の、いともとふときほんどう地内、けがはなみ木ときをばげまして、いさむ心のこまかたよりは、地しんさはぎに火がもへあがり、すわやすわ町、こりやたまらぬと、かほもからだもくろふね町で、おさきまつくらくらまへどうり、こゝもくづれて天王橋に、あめやあられとふるかわら町

江戸大火ぢしんくどき

七五

〽またはサアエ、本所と石原かけて、いへもどぞうも皆わり下水、のきはそろへて立川
ならで、かゝるなんぎに相おひ町や、うきめみどり町、わがはな町も、いしですりむ
き、まめまんぞくの、ふたつある目をひとつめばしと、なるはみらゐのつみ深がはに、
うへをもちした、たかばしかけて、焼とくずれが大しま丁よ、あとは野となれ山のて
へんは、ねづに谷中の此大ぢしん、はりやてんじやう上からおちた、うしにひかる、
せんこうじざか、ころげだしたる身はだんござか、いつけしんるいゆりつぶされて、
てらもはかばもみなむゑんざか、こんなふしぎはどふいふもんだ、これもたとへのく
わうとくじまへ、たれが三のわもかくなりはて、いまはかなはぬかなすぎどふり、
ころぶさか本・山ざき丁や、めぐるいんくわは火のくるまざか、やねの上野に火の子
をふらし、いへの下谷は火がもへあがり、なさけなちやう、血のいけのはた、みづ
はゆしまと、さてにへあがり、けむるやけばにいききりどふし、おやのゆるしたつま
ごひざかの、ゆくゑたづねてめうじんさまへ、かけたねがひのすじかい見つけ、人の

すだ町新ごく町に、こわすなべ丁、又かじ丁と、すへのなんぎを今川ばしや、日本ば
しから火の中ばしとあすや京ばし、のじゆくをするも、しばししんばし、なんぎをこ
らへ、しんぼしばる町宇田川町も、やけてかなすぎあとしんなみと、おかもうみべも
はまゝつ町に、田町たかなわ八ツ山の手の、あざぶさくらだ、あかさかかけて、すな
をふきあげ、かはらをとばし、おんなわらべはなきかなしみて、くらにねんぶつ、だ
いもくとなへ、あしはすくみてはのねもあはず、にげる市ヶ谷、荷もつにおされ、見
るもさんくじごくは四ツ谷、いつのむかしにためしもあらず、これも七なんしよ七
なんしよ八ほうへ、にげるくらがり十月二日、けふはいかなるあくにちなるぞ、一ッ
けしんるいきようだいゑんじや、おやにわかれて女ぼにやはなれ、かわいわが子がさ
て小石川、たよりきくざか、いきしにふたつ、ぶじなかほ見て氣もとびざかの、うそ
か本ごう、ゆめかとはばかりヤレンイ。

吉原名よせ大地震やけはらくどき

下

■ 印	大まかき大みせ
⬆ 印	半まがきまじり
○ 印	惣まがき

なかにサアエ、あはれは、しんよしはらの、五町まち／＼ゆりくる地しん、くぐる地ご
くの大もんぐちや、いろとよくとのそのなかの町、ひろき江戸町一丁目より、かゝるさ
はぎのおりふしみ町、火事よ／＼とこゑあげやまち、きのふ京まち、ついいま／＼でも、
はなのくるわにすみ町なるを、かはりはてたるやけ野のきじの、かごをはなれた身は

羽ぬけどり、にげる手だてもたゞなくばかり、かむろだちからうき川たけの、ふちに
はまりて地しんのために、またもならくへしづむといふは、きやくを手くだでだまし
たばちか、ころしもんくのきやすめいふた、つみはてきめん、ちしごのくがひ、もん
日もの日のそと八もんじ、さとのどう中、さてひきかへて、いまはかなしきめいどの
たびち、小つまからけてにげんとすれば、はりにうたれてひらめのごとく、おろすは
ねばし、おはぐろどぶへ、はまるわが身はどろ水とせい、けむにつ／＼まれ火の子にお
われ、かほもからだもくろすけいなり、水もまわらぬ水とうじりに、さとのうじがみ
火ぶせの神の、あきはさんざん、さてうらめしや、のきをならべたそのゆう女やは
■ 火ゑん玉や ともへたつけむり、たてたはしらの⬆ 大こくや さへ、やけて
くづれてちる○ さくらや に、にげて⬆ いづみや としごろためた○ かね
こいせや もみなすておいて、なんに○ 大ぐち 氣も○ むら田ゑび まがり
○ 角 つた はしらがたをれ、であひがしらにみな○ しんさがみ いのち⬆ お

吉原名よせ大地震やけはらくどき

はりや	大地 <small>たいち</small> がわれておちる	たに本	もふ	あつまや	のこれが見 <small>み</small> おさ
め、かなわぬ	かなや	ひさき萬じや	火 <small>ひ</small> もとのけむにまかれ	まるこ	
まいき	ふくずみや	くすれ	ますや	と目 <small>め</small> で	みうらや
火 <small>ひ</small> の粉が、さて	きのへねや	うちもからだも	ひらのや	なれば、しやば	のかどに
とめいどの、その	さかいや	にたちつ	いな本	火 <small>ひ</small> の	中まんじつ
れを	まつだや	さのくら	がりで、かゝるうきめに	あふみや	な
れば、いきもたへ	目 <small>め</small> も	くら田や	で、あわを	ふく本	たど
ばなや	すがたるび	さへ、おはうちからし、ひとが	みなとや	はづかし	立

そふに、しどけなりふり、なじみのきやくをたよりくして、とぼくゆきやるヤンレイ。
 さてもサアエ、ふしぎは、こんどの地ぢしん、江戸の横たて、すみくまでも、くすれ
 ゆられて、そのうへやかれ、きせん上下のそのひとくは、にわかこぢきになるもの
 おほく、夜かせ身にしむさむさのなかに、野じゆくするやら、こもひきかつぎ、ないて

あかした一七日の、くらふかんなん、きもたましひも、さらに身につくわがものとして
 は、ねまきいちまいひきごびひとつ、されどとふときわがしんこくの、神のたすけか、
 いちにちましに、四海なみかせおとなくなりて、諸人あんどのおもひをなせば、おか
 みさまよりおめぐみあつく、やけてつぶれた身がるきものへ、はかりしられぬおすく
 ひ米まいの、かすはおくまん、まだそのほかに、しよくへお小家こやをくみたてられて、たみ
 をにぎはすおんこくおんの、かゝるなさけも、せうぐんさまのおひざもとなる、そのあ
 りがたさ、これもたとへの大あめふりて、地かたまりたるまんざいらくは、からき世
 なをし、またとしぐにみのるほうさく、ごこくのたねも、しげるできあきせんしう
 らくの、ゑだをならさぬ、このときつかせ、いまのなんぎをひとくともに、むかし
 がたりとなすものならば、いきてかひある上々國の、これぞさいほうごくらくせかい、
 くもるそらさへたちまちはれて、もとのわがみにいまたちかへるヤンレイエ。



地震の状況を世に知らせるもの

假名垣魯文が嘉永頃に大道山人といふ作名で、ヤンレイくどきを作つたといふ、嘉永の初には盛に行はれたらしいが、我等は其の起原を知らない、勿論さう古いものではなからう、孰れにも心中物を主要な題材とした、それも芝居や浄瑠璃でお馴染みが多い、中には新しい心中物を作つたものもある、それ故に後には心中ふしといふやうになつた、ヤンレイくどきとしては、大地震などを捉へたのは變り物なのである。

きとう、伊せかしまさま、いのる寺みや下々までも、一しゆけんめにまんざいらくよ、やうく三日めの八つはんころに 地しんしづまり、ゆめみたごとく、家のやけかづ十萬あまり、大名やしきに、てらみやまでも、はしはのこらず、川すじくわる、人のしんだる、そのかづしれづ、あはれなるかや、しんだる人は主もけらいも見はけもならぬ、おもへくのおてらへうづめ、残るけが人、御上様の所々に御すくい小やが、はやくかゝりて、たすかりまするヤンレイ。

下

中にサアあわれは、しん吉原よ、五町のこらず、みなゆりつぶし、人のしんだるかづしれませぬ、なにをいひにもにげ所なし、みんな一衆しゆにゆりころされる、かさねかさなり、このはのやうに、ことに遊女のば所であれば、諸方あつまり、其客人は、これがどちらのだんなかなども、あれがいくくのむすこか、ばんとう、かさねかさなり、

あまたのしにん、山につんだる、そのしに人を、うでがおれたり、足やけたので、一かうわからぬ、いくの人か、わかりかねたる、そのしに人を、みんな一衆にくわさうにいたし、今はよし原すり鉢あなで、よるは淋しき人こひせつよ、それにつゝへて山のしく田町、芝居三丁不残つぶれ、わけてしばへは人気なやく□人はのこらずそくじにいたし、あとがたゝぬではなしの外よ、ほんにせじうはきみちにわたれ、ころちがへは天めがつきる、かわへこそすて、おつとにわかれ、一人ころでどうしたものよ、しあんしかねて、十方とほうにくれる、これをきへても、せじうの人よ、ひどのつとめをだへじにいたし、ころちかへのなへやうになされ、いつのなん時とき、じしんがひゆと、いまに代じがはれよとまよ、かくごきわめて、まんさいらく、ヤンレイ。

安政地震後に極めて早く出版したものらしい、例の版式でなく如何にも匆劇らしい様子が紙面に見えて居る、最近の震災に辛くも刷出した都下の諸新聞紙の状態と見較

べて 誰も感慨を深くするであらう。又た吉原のすり鉢穴は何時まで恐ろしいもの
と警へにされたといふ。

安政六未年七月關東大水之次第

扱もサアエ、とうときをさまる御代は、おそれおしくも御上よりも、所々のあればをけ
んぶんありて、すぐに諸方へ御ふれ出シ御用かゝりの役人さまは、小屋をくみたて、ち
うやをかけて、いだすおすくい數萬の俵、御用のぼりの空ふく風に、いさみよろこぶ
す萬の人が、上の御おんをわすれぬならば、日々のつとめをしゆつせいすれば、神と
上との心になひ、五こくみのりてくる年ごとに、せかいゆたかはめのまいなれば、
こゝをよくくわきまいたまい、扱も水ごに御ふれ出シ、又も諸人に、其御手あての
あつき 忍様 館林様 古河 御城 川越様 や猶も其外町在ともに、水のさ中
にたきだしいたし、おもひくほどこししたる人もせけんにあまたでござる、かゝ
るおりなるじひせんごんは、聞くもとうときしたいでござる、さてもとしくなんぎ

なことを今とし水にて流した上は、せかい一とう、らいねんよりは、ごこくじやうじをたのしみくらす、爰にほどこし出した人は、本庄浦にて横せのおぎの、このや近邊なんぎな者へ出ス御すくい數萬のたはら、それにつゝいて下なら村の、吉田氏とて持丸長者、是は殿様御知行内の人數改御すくい出ス、其や俵は八千俵よ、又は上州館林にて、こくやとせいの文藏殿は、關東一なるこくやであれば、これはきん邊きんざい共に、人す改三ツ子に迄ものこる方なくほどこし出ス、又も三林彌五左衛門は音にきこいしもの持なれば、こんどほどこす俵の數は千か二千ヶ其數しれず、それにつゞいて下中條村の是は永沼徳右衛門殿よ、音に聞へし船づみ問屋、見せは荒物材木屋に而、今の主人はきどくな者で、出スほどこし其數知ズ、小釘村なる新六殿は是も大家な者もちなれば、是もあまたい施シ出ス、又もぬかたの權兵衛殿は水のさ中にたき出シいたし、船につみあげ諸方へくばる、騎西領にて西のや加藤、是も中く、大家でござる、是もほどこす其數しれず、日光道中幸手宿よ、音に聞へし長嶋やとて見せは太物材木屋にて、町家のこらすほどこし出ス、宿のつゞきの牛村秋間、是もしはい、ほどこしまする、久喜町にて大家なくらし、爰にいせやの新兵へ殿や、又井の上善兵衛殿よ、出スほどこしあまたござる、御成海道 **岩附様** や、城下内なる大家な者は、こんどほどこし俵の數は、凡二千と七十五俵、それにつゞいてかすかべ宿の、爰に山口萬藏殿や、つぎにわたやに東や金子、是も施シ金千兩よ、又わ大澤越ヶ谷浦の、音に聞へし松ぶし民部、今年水にてなんぎな者い三り四方へ施シ出ス、猶も下サ 其名も高き野田の町人高なし様は、四五り四方へ施シ出ス、其や數々かぎりもしれず、老も若きもみな一流にあつきなさけのありがた泪たヤンレイ。

此の時の事は嘉永明治年間録に委しく書いてある。専ら義賑の情況を述べたのは興味もないものだが、又た考へれば一方に醜出しない富豪に對する緊しい要求であつて、汝に人心ありや、人情ありやと叫ぶ聲にも聞かれる。

鹿兒島太平くどき

上

〽お國サアエ、薩州鹿兒島おもて、あまた士族のあるその中に、西郷たかもり陸軍大將、桐野利秋りく軍少將、つぎに篠原國もとなるは、同じ少將のつとめでござる、むら田新八陸軍大佐、伏見戦争やおうしうのいくさ、負すおとらぬ皆豪けつよ、東京おもての勤めであれど、何か儀ろんのとほらぬことで、そのやつとめを免職ねがひ、國へかへりてみなそれくくに、學校ひらひて生徒をあつめ、または猪がり鳥などうちて、足をならすをつとめとなさる、それを見ならふ生徒のよふす、十五以上のあらくれ男、學校修行の其ひまあれば、野山あるきや劍術けいこ、鎗やかたなを身にはなさぬは、かねてよふすのあることなるか、それはさておき東京よりは、重いおやくのおさしづ

うけて、明治十年二月のはじめ、薩州おもてにある彈藥を、船につみこみ持かへらんと、ひるは人目のある事なれば、もしやさまたげなすとも知れず、ならばひそかに船づみせんと、日暮すぎよりはこびにかゝる、それとみるより學校生徒、いつの間にやら寄集りて、はこぶ彈藥ざんざりとめ、うはひとりてぞにげうせまする、その夜海軍造船所なる、火藥庫へと押入まして、火藥諸道具もち出しまする、そこで生徒は悪事につのり、おなじ鹿兒島士族のうちに、東京じゆん査で歸縣をねがひ、國へかへりて居る人くくの、たくへおしよせ悪口まじり、何の用事で國へは來しぞ、巡查つとめるその上からは、くにのよふすをたんさくするか、または西郷をころしに來しか、誰のさしづかはく状いたせ、云ぬことなら其まゝおかぬ、いのちほしくはかくさすいへと、よつてたかつてむりわうじやうに、西郷大將をころしに來しと、はくじやうさすればその事譯を、直に認め口書とりて、それを持行西郷につげる、そこで西郷もいかりのいろを、つゝみかねたる風せいであれば、桐野しの原見てとりまして、かゝる證

據のある事なれば、東京表へ出立いたし、何のわけにてかくわれくを、にくみ玉ふか政府へとふて、事のしさいをわけねばならぬ、いざや用意と生徒へふれる、それと聞より同意の士族かしらだちたる名まへをいへば、別府新介、西郷小平、逸見十郎太、いけ上四郎、ふちべ高照、永山矢一、その余けつきのわかものどもが、鐵砲玉藥鎗長まきと、得ものくをひつさげまして、くればたちまちあまたの人数、兵糧彈藥十分そなへ、馬場の廣場へ隊伍をくませ、そのや人数は一萬五千、されば篠原先陣大將、二ばん桐野で後陣が西郷、二月中ばで日も十五日、いさみたちてぞ出立いたす、ゆけば日ならず水俣驛よ、こゝは肥後國八代手まへヤンレイエ、。

下

こゝにサアエ、熊本鎮臺兵は巡查あまたを、くりこみあれば城のくちく、かためを付ける、そこで縣てうお勤なさる、御役人がた兩人ほど出張なされて萩原宿の、薩州

より來し宿割人に、さてはこの度西郷うちの、兵士大勢めしつれられて、何の子細で通行あると、とへば宿割されはでござる、西郷桐野を殺さん爲に、東京勤めのじゆんさをゑらみ國へ出張させたることを、東京表へ出立いたし、事の子細を尋んために、大せい召つれ鐵砲もたせ通行するとも陸軍大將、何のゑんりよもない筈なりと、いへは役人口をばそろへ、たとへ陸軍大將たりと、自ま、勝手に兵士をつれて、城下通行なさるといふは、國のおきてを守らぬなれば、東京表のお差圖なくばひとりなりとも、かたなをさせば通行ならぬとさしとめまして、いそぎけん廳へたちかへります。そこで熊本鎮臺兵は、二中隊にて繰出しまして、法華坂にて鎮まりかへり、賊の手近に來たるをまつに、先手篠原國もと隊は、淵邊その外一大隊で、勇氣りんくすんでまゐる、待にまつたる鎮臺兵は、らつば吹たて筒ぐちそろへ、鐵砲はなせば彼なたの賊も、喇叭ならして號令なせば、右へひだりへ散るかと思れば、物を小だてにうち出す玉は、雨かあられか、たとへもあらず、すはや戦争はじまりたりと、城下宿村、老弱

男女、上を下へと騒動いたす、そのやありさま目をあてられず、城の兵士は大砲數挺、たかきところへひきあげまして、敵の陣中みぢんになれと、け
と、あらせずうち出しければ、ついに賊軍木の葉のごとく、崩れ立たる其折からに、敵はすげなし踏とどまれと、賊の後陣が押よせければ、もはや熊本鎮臺兵は、二中隊にてさへもできず、城へ引あげ籠城いたす、そこでいよく西郷桐野むほんなること隠れもあらず、東京大坂京都へしれて、西郷其外官位をはがれ、賊の名義におちいりまする、されば賊徒を追討せよと、おふせ出されて海陸軍の、お役々には兵士をひめて、警視方には巡查をあまた、けふもあすもそのかづしれず、蒸氣船にて出張なさる、夫はさておきくま本城は、四方八方賊徒がかこみ、かわしのこりの古城なるぞ、今朝をかぎりにおしつぶさんと、しよくちもろともひら一めんにて、つ砲はげしくうちよせまする、城の中には谷少將が、中佐そのほか巡查と共に、しよくのくちくきびしくかため、城の高みへ筒口そろへ、大砲小銃のたへ間もあらず、あちらこちらと

差圖をなして、敵をうつこと其數しれず、されど賊軍一步もひかず、晝夜かけての大戦争に、城の破れぬけん固といふは、さしもむかしの清正公が、築き玉ひし要がいなりと、敵もみかたもみなほめまする、たとひ賊軍いか程つよく、軍する共そのすへくは、天の罰にて亡てしまふヤンレイエ。

鹿兒島太平くどき

二 編 上

城のサアエ、まはりはのこらす賊に、すきまあらせず取かこまれて、打つ打れつ戦争たへず、はや援兵きそふなものと、城の高みへ登りて見るに、植木村ともおぼしき方に、はるか鐵砲の音聞ゆれば、これぞ福岡鎮臺兵か、または小倉の分營たいの、來しを賊徒がさへざりとめて、戦争はじめしことかとさつし、されど城下へ出ることなら

ず、とかくするうち明れば二月二十三日のあかつき方よ、賊の新手の勢いつよく、城の南と西からせめる。そのや大砲小づゝをませて、すゝめくと小隊頭 別府所右衛門がうれいかけて、さきへすゝみてはげますほどに、あら手暴徒ははやちん臺の、間ちかまで来てきり入るところ、官軍がたよりうち出す銃の、おとともろとも小隊長の、別府所右衛門うたれてそこへ、たをれかゝれば兵卒あまた、かたへひつかけにげさりまする、またもひるすぎ花岡山へ、大ほう三門引あげまして、四方地村へん、高麗門へ、うつてかゝれば官軍がたの、歩兵少尉の土肥某が、いかり立てぞ賊軍めがけ、うてよみぢんにみな殺さんと、先へいさんで進みしところ、賊の大將篠原はやく、これを見るより號令かけて、打てよねらへとさしづをなせば、得たりかしこく、みなものかげにかくれひそみてねらひをさはめ、これぞ別府のかたきといふて、うてばたちまち少尉のむねへ、どんとあたればそのまゝそこへ、たをれかゝるを兵士がたすけ、城のうちへとつれゆきまする、されど官軍すこしもひかず、おめきさげんで戦ひけれど、

勝とまけとのさかいかもつかず、日ぐれまへかとおぼしきころに、双方鐵ぼうのおとしづまりて、しばしその夜はおだやかなれど、二十四日のあかつきまへに、賊はまたぞろ花岡山と、外に段山あはせて二ヶ所、大砲六門ひきあげまして、城を目かけてうち出しまする、そこで官軍やつきなとりて、打つうたれつちうやのいくさ、そのやさはぎに城下のまちは、残り少なに焼はらはれて、いとも廣く原とは成ぬ、さても福岡小倉の兵は、大尉がたにて引連られて、植木驛にてはからず賊と、出合がしらに戦争始め、何とよふすも夜道のくらさ、殊に官軍旅路のつかれ、こゝは一トまづ引あげおいて、あとの兵隊来るをまつにしくはあらずと、いくさをやめる、そこで翌日後詰のたいと、もふしあはせて、ものみの兵を、四十人ほどくり出しまして、田原坂より境木かけて、木の葉町なるはづれに來れば、ふいに賊より銃おと高く、打てかゝれば心得たりと、そこで官軍二百の兵を、三手にわかちてよし松少佐、兵をさしづしくり出しまする、賊のかたには西郷小平、その余隊長六七人が、千に余れる人数をひいて

これもおなじく三手にわかち、いさみすゝんで打つ鐵砲の、おとやはげしくこだまにひびくサンレイ。

二へん下

敵とサアエ、みかたの淺深ばん苦、玉のゆき來はいとすさまじく、雨かあられか、あらしの木の実、たへまさへなく降り來るなかを、おめすおくせず兩軍ともに、うちつうたれつたゝかふひまに、ぞくはひそかに兵士をわけて、木の葉山なるちか道こへて、いつのまにやら官軍がたの、うしろ山邊に火の手をあげて、打てかゝれば官軍がたは、すわやうしろへぞくせめ來しと、足もしどろにうろたへまはる、少佐大尉の役々方は、たとへなん萬せめくるとても、おそれにげるはひきやうであると、四方八方こゝろをくばり、兵をはげましふみとどめんと、こゑをかぎりにさしづをすれど、くづれ立たる兵士のならひ、そこで隊長吉松少佐、てきの鐵ぼうはげしき中へ、うまをのりいれ

大聲あげて、つゞけものどもすゝめやすゝめ、打てよつけよときびしきさしづ、そのや勢い獅子ふんじんの、あれにあれたるふせいでござる、賊もしばらくそのいきほひに、すゝむ事さへようゐにできず、鐵砲どんくこめかへうてば、ついにうたれて馬より落る、されどくつせず又おきあがり、うまにひらつとうちまたがりて、われとわが手でわが身をしかと、うまのくらへと手づなでしぱり、むちをひとあて猶百ばいの勇をふるつてせめ立ければ、さしも敵軍おひくづされて、みぎへひだりへみなちりちに、すがたさへなく逃うせまして、あたるものなく見へけるほどに、兵士かけより馬ひきとどめ、ひかへさすれば吉松少佐、もはやいきたへこたへもあらぬ、そこで陣屋へ引あげまして、手づなとくく馬よりおろし、醫者よくすりとかいほうなせど、いきのかよひもつきかねたりし、そのやからだをあらため見るに、十二ヶしよなる鐵ぼうきすの、あるを見るものみなくちんぐに、ほめるこゑさへしばしはやまぬ、そこで官軍兵士をまとめ、直に引あげ南のせきへ、陣をとりてぞかためをなさる、それと

聞より賊軍なほも得たりかしこく、木の葉の驛へ陣をはりてぞ、中田へかけて打て出
んといきはひつよく、肥後の士族も同意であれば、自由じざいの道あんないに、高瀬
ゑきなる區務所をめぐり、兼て用意のたくはへ米や、所々の米ぐら手當り次第、うば
ひとりてぞ持行まする、この町村かしこのゑきと、うへをしたへとそうどういたす、
かゝるなんぎをすくはんために、猶も官軍用意をなさるヤンレエ。

爰では假字が減じて真字の増加が目立つ、それが文明開化の御利益なのか、板式も
綴本の體裁になつた。

欠

欠

「女づくし見立十二ヶ月世さ聲ぶし」此の項は其筋の注意により一〇一頁より一〇五頁三行目まで全部削除す。

ヨサコイの替唄である、此の唄は安政五六年に流行したのだ、各種の女を品題とすることは別に珍しいでもないが、此の際圍い物を捉へたのを面白く見る、といふのは安政六年八月、町奉行が幕閣へ申告した處に依れば、

市中住居の女は圍妾とか唱へ、月々金三兩位より五六兩迄手當取候者は、其圍主一人にて、古來有來の處、近來安圍と唱へ、或は三分一兩位手當うけ候圍者は、圍主三四人づゝも有之、賣女同様の所業に及び候者數多相成候。

と云つてある、是は外妾の風儀が變つたのではなく、誰も彼も船板塀に見越しの松、下女一人に猫一疋の圍者を羨しがつては見るものゝ、需要者の範圍が廣くなつては、

女づくし十二ヶ月見立て世さ聲ぶし

相當の資力のない者は勢ひ斯うした廉價な安園に満足しなければならぬのである。しかし安政になつて安園といふ名稱が聞へては來たのだけれども、其の事實は其の前からあるので、只だ名稱がなかつただけであらう、久夢日記に、

江戸表にても明和年中よりかこひ女あり、また娘を京都の如く男四五人にかこはせて、月々金二分又は三分或は一兩出し、是を四五人にてかこひおくこと、下町淺草下谷邊に多くあり、文化に至りてはなほさら多し。

とある、それが安政になつて愈々甚しくなつて來た、雜件録(安政六年)にも、天保改革以來、武家町人又ハ諸國ヨリ年中出府致候在方ノモノ、類、夫々園妾ヲ抱候風俗追々甚敷、當時ハ商家ノ娘共等、年頃ニ相成候へバ忽園口有之、身ナリ手當モイタシ貫ヒ、一ト通水仕事奉公杯ニ差出候ヨリハ彼是勝手モ宜候故、自然セリ合候テモ右ヲ好候。

といふ有様で、園者も安園も急激に増殖したと見へる、一體安園は半園の變化らしい、園つた女を其の儘に父兄の家に置き、園つた者が通ふのだから、カチ合はないやうに遺縁をすれば幾人でも旦那が取れるのだ、其の半園は僧侶の墮落から發生したものらしい、明寛秘録(寛政元年)に、是迄は寺方に園女或は人の妻娘杯を半園ひにいたす類ひ多しとある、寺へも連れ込めず、一家を持たせても人の目に立つ、それを避けるために其の儘自宅に置いたのであらう。

假宅流行伊名勢ぶし

▲お江戸エ、く日本橋、さかりば雑魚場ざこばに、しんばか四日市よっかいち、また小田原町、かぎはんだいで、かるこよぶこゑおしをくり。

▲あさ市、夕がし、まけぬが江戸ツ子、きをいのあきなひ、サツサさつくとかはぬか、ぐづくするなよ。

▲今のエ、く評ひやうばん名代は、あさくさおく山生人形いきにんぎやう、義士ぎしすいこ傳でん、アノ御てん場ばのきみにあふみのおかね女郎ぢやうらう。

▲ためともくすごいが一ツ家や、白イものぞいて、サツサくもの上からおつこちた。

▲さかるエ、く職人左官しやくにんに大工か家根屋か仕事師か、また材木屋、ヤレ土方の子、

はやで居のこり晝休み。

▲せいだせくうできりはたらけ、かせいだあげくは、サツサ假宅女郎しゆにはこぶこつたヨ。

▲のらでエ、くおしやらくおむすが、しんやのぎうたにかつぼれて、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○。

▲こそくむぐくまなこでしらせりや、あごたでさとして、サツサばんげもせどからしのぶこつたヨ。

▲○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○。

▲○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○。

▲質屋エ、くやりくり、さんだん、どてらとあはせの入替いれかへか、この下馬したうまをちよつ

とのりかえて、これさ捨りをおきなんし。

〽ばんとさんくもそつとかさぬか、ながれがきたら、サツサさらりとながして、くなしにせう。

〽夏はエ、く兩國すゝみか、屋形に屋ねぶね、かげ芝居、ねこしんねこで、よいしゆびのまつ、つなぐもやゐにゑんのはし。

〽姉はエ、く宮ぎのいもとは、しのぶか、白石はるくと、きやうだいこくや、アノざしきめぐり、くるわの女郎花。

〽あだうちくだどアまや、がアまは、うつちにもふした、ハツハかなしうごんざる、たまげたこんだよ。

〽成田エ、く、出開帳さんけい色かも深川永代寺、くんじゆもどりがけ、ちよつと假宅で、いきたべんてんさんのおかいちやう。

〽あがりやしんくおつとめ、三分がいやなら、サツサ二朱か四百でごろねとせう。

う。

安政三年二月浅草奥山の生人形の見せ物、肥後熊本の松本喜三郎作で大評判、生人形の錦繪數番出る。

成田山出開帳は同年三月廿日より六十日間。

三分、二朱、四百といふは女郎の揚代で、四百文は長屋遊びといつて最下等。

いなせぶしに限つたことではないが、流行唄が何を捉へて居るかは大に注意すべきである、其處からは江戸の民衆の腹の底が覗けるだらう。

色里伊名勢ぶし

▲ 桂エ、く文治の聲色、柳枝の身ぶりか、樂丸が、こゑぎやうさんは、あの文樂で、入船扇橋勝次郎。

▲ かけもちく、よるひるきやくどめ、しぶいが、すきならハツハ龍生玉輔めいじんぞろい。

▲ 下りエ、く團藏お目見へ勘彌のやぐらと河原崎、悪大友に、我童菊五郎、しける葉村屋に和三郎。

▲ とうざいくしらせのチョンく、とめばのかけごへ、サツサはくしよくでがあるよ。

▲ 土地はエ、くあさくさ藏前、かん田に本町てんま町、場所大通り、又山の手は

四ツやあかさか、かうじまち。

▲ 大名小路くひろひがあざぶで、きはひがほんしば、ハツハたまちに高なは十八丁かへ。

▲ 名倉エ、くほねつき、おらんだ南ばんりやうじか、外科あしやの、あの五臟圓、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○。

▲ りんびやうやみくせんきの金玉直すがりやうじじや、ハツハはなのせうじもじつきにはめましょ。

▲ 神ぐらエ、くお湯花、十二座、ちんじゆのまつりか御き禱か、あのどうけがほ、じやうだん、ひよつとこにはんにやめん。

▲ ばかつれくすつてんてれつく、てんぐの面、サツサおかめの面でまいかけな。

▲ 女郎はエ、く假宅、宿場はしな川新じゆく板ばしか、小津大千住、藝しや柳はし、おかこくろべいづくりにおきなんし。

〽だんなせめくほしいものねだりや、しばるがすきなら、サツサかわりめくけんぶつせう。

〽彦三エ、く改め龜藏、悴の竹三は彦だんな、所作福助に、藝小團次か、おやま桑三に菊次郎。

〽ぬれ事く御てんば女中しゆに、世話場の小むすめ、サツサたがひにのぼせて、むちうぞろひか。

〽むすめエ、くとしごろ彌生は、いろづくさかりか花のかほ、目もほんのりと、あれさくらいろ、桃に毛むしがはへかゝり。

〽しろざけくはまぐりよ、さかなに、としまや、すきなら、サツサ大きなこつぶでさしませうかい。

〽はるのエ、くにぎはひ、うはきで假宅めぐりは花川戸、さく山の宿、どふ聖天町、さかる元地に廣かうじ。

〽はんじやうするく深川七ばしよ、やすいがすきならサツサ切みせ、ながやでてつぼうにしよ。

四代目坂東彦三郎が龜藏と改名せしは安政三年春。

此の年に河原崎座の名代を森田勘彌と改む。

地震後の假宅は浅草東仲町、西仲町、花川戸、山の宿、聖天町、金龍山下瓦町、今戸町、山谷町、馬道町、田町一二丁目、深川永代寺門前町、仲町、山本町、佃町、常盤町一丁目、松村町、本所御船藏町、八郎兵衛屋敷、松井町一丁目、入江町、長岡町一丁目、陸尺屋敷、時の鐘屋敷。

上^ニ淨るりさわり文句よいわいなぶし

新左衛門やかた

一ツトサア人のこゝろもしりもせで、よめいりせいとはどふよくな、コレやつこのみちすけヨイハイナ。

お 三 茂 平

二ツトサアふみのもんくは小春への、おさんがかけたるむねのなぞ、コレ治平にしたらせてヨイハイナ。

八 百 や お 七

三ツトサアみたいわいなと、みをやつし、ゆきのふるのにかちはだし、コレ吉三におふたらヨイハイナ。

白 石 茶 や ば

四ツトサア吉原すゞめがア口ぐに、いなかむすめをなぶりもの、コレまさよふだいふしぎで、ヨイハイナ。

お 半 い せ ま い り

五ツトサアいろのはじめのいせまいり、いしへのやどやでかりまくら、コレおはんが初^{はつ}たびヨイハイナ。

玉 も の ま い 四 ツ 目

淨るりさわり文句よいわいなぶし

六ツトサアむねのけむりはふじあさま、おやなが心のくるしさは、コレあかしていうたらヨイハイナ。

いもせ山三

七ツトサアなつかしゆかしのひな鳥が、まゝにならぬが吉の川、コレこがさんみたならヨイハイナ。

忠臣ぐら八

八ツトサア山しなさしてのおやこづれ、戀のみち行はるぐと、コレ力彌におふたらヨイハイナ。

油やおそめ久松

九ツトサアこゝになだかき油やの、おそめがはらをびとけかねる、コレ久松ゆへなら、ヨイハイナ。

あはのなると八ツ目

十ヲトサアとしはも行ぬにじゆんれいが、國をたちのきはるぐと、コレおゆみにおふたらヨイハイナ。

太功き十

十一トサアいとかわいの十次郎が、いくさの門出にのしこんぶ、コレ初ぎくわろふてヨイハイナ。

千本すしや

淨るりさはり文句よいわいなぶし

十二とサア二せも三せも婦夫じやと、すしやおさとがつるべずし、コレこれもりたすけて、ヨイハイナ。

人形芝居は早く衰へたが、嘉永以降太夫が寄席へ出るやうになり、是は娘義太夫とは違ひ、眞に立派な藝を持つて居たので、義太夫で寄席の景氣を附ける程な勢をなした、其の繼續が東京の初にまで及んだのである、さうした景氣であつた餘波は斯うしたものにも見られるではないか。

地震はくくよしこのぶし

▲瀬戸物やの南京娘、りんなりちやわんやびせんやき、色附にしきでかんどくり、すいたおまへにさしみざら、なじみかさねたふた物を、ぬしは茶つぽに茶さんすが、ひゞたけほれたは此間の、ぢしんでわられた中じや物、どびんと思ふてやきつぎて、しつくり合て下さんせ。

▲地震此かた世の中に、しばらくお間たいこもち、役者はお休たんまり場、げいしやは座敷がなくばかり、しちやの出入は御門どめ、是はどふしやうこうしやくし、末の代までも咄しかと、うでをくんだる高利かし、かりてのないのはかし本や、假宅がよいは諸職人、ふられてかへるもあり升る、ぢしんで、もうけたかねじやもの。

▲此頃はやはり土方と車力、一せんめしには茶わん酒、諸しきのげん金あら物や、わ

らじが、わるけりやあやまろう、ひらやすくりにしやしやんせ、大屋のお内も假宅で地主はふしんが出来ぬゆへ、いなかの親類へかねくめん、てがみづかいじやわからない、地しんでまいつてはなします。

▲深川七場所大ぶるい、とんだ地震が入江町、これはびつくり常盤丁、からだはがた／＼古石場、おたびもはかづににげいだし、あひるの様なこしつきで、見舞がくるかと松井丁、なんとしん地やあみ打場、わたしの内は大きくづれ、おもてやぶれにくらやぶれ。

▲當時もつばらもちいる物は、印半天かわ羽おり、いなかの大工さんが金もうけ、仕事はこて／＼左官やさん、あがつてさがるは屋根やさん、大どりしやうより小まいかき、是さこれもし大屋さん、店ちんよこせはどうよくな、たなこ大じと思ふなら、家のまがり直さんせ。

▲色のよし原おいらんしゆは、はりといきじにくるはをにげて、とんだちしんに大門

口よ、かむろはくるかと思かへり柳、土手八丁もゆめうつ、山谷田町に山の宿、今宵野じくを芝居まち、屋根のかわらはおつこちで、お客の道ぐの馬道よりも、火の子にはよわり升。

▲藏前の藏舟丁の、くらやの藏さんは、くら持で、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、ばん藏だましてかねぐらもうけ、ちしんでぐら／＼お藏をいため、土藏をふるつたそのあとで、しんしやうふるつてめまつくら、親父もびつくら大かぐら。

安政大地震の後、まだ間もない時のものらしいが、吉原が深川其の他へ假宅を許され、安政二年十二月から翌年へ掛けて営業を開始した、其の假宅の情況が唄つてあるのを見れば、十月二日の地震の後、尠くとも四五ヶ月は過ぎて居やうと思ふ。おあいだといふは當時の流行言葉だ、新板あふつるよしにも、『此頃せけんの人々が、

地震はく／＼よしこのよし

わらかしやアがるおあいだといふがくせ』ともある、又地震後の一枚刷に、

物るいちも時當

同	同	同	前	小	關	大
荒	車	ひ	頭	結	脇	關
物	ひ	杉	ひ	ひ	こ	穴
や	や	丸	ら	ら	け	ら
力	め	太	ぶ	ぶ	ら	藏
履	草	家	き	き	ぶ	藏
同	同	同	同	同	同	前
す	屋	た	さ	ひ	わ	印
き	臺	し	し	も	ら	半
く	見	つ	の	長	半	引
と	世	の	立	天	の	屋
走	の	火	喰	じ	天	引
同	同	同	同	同	同	同
紙	か	大	火	茶	三	一
く	こ	色	事	わ	尺	ぜ
ず	し	現	羽	を	ん	め
ひ	ひ	金	を	酒	帯	し
る	本	も	ち	り	し	じ
い	屋	の	屋	し	り	湯

物なだいを時當

同	同	同	前	小	關	大
小	船	せ	檜	二	瓦	土
間	や	つ	の	階	屋	藏
物	木	角	家	根	藏	藏
屋	ど	た	角	家	根	藏
同	同	同	同	同	同	前
は	お	こ	よ	上	下	羽
り	客	そ	ゆ	う	を	つ
し	の	ゆ	き	の	着	物
ご	御	の	着	物	を	駄
と	馳	走	つ	物	を	駄
同	同	同	同	同	同	同
紙	か	上	唐	茶	ご	會
く	こ	唐	茶	ご	會	お
ず	し	棧	棧	席	席	たい
ひ	ひ	の	の	料	料	い
る	本	羽	羽	の	の	い
い	屋	を	を	湯	湯	し

とある、此の品々を見ておあいだの意味を解するも亦た一興であらう。

又色付錦手爛徳利といふ、其の爛徳利は寛天見聞記に「銚子は染付の陶器」とあり、挿畫にては由縁の梅二編(天保十三年刊)の早いやうに思ふ、孰れにも瀬戸物の爛徳利は天保以後のものであらう、それが安政の初めには錦手のあるやうになつたのである。

モウ一つ、地震ぼく／＼よしこのぶしといふ、此のぼく／＼は木魚の音で、當時盛に面白がられて居た阿房陀羅經の影響と眺められる。

辰巳假宅やつちよるぶし

▲二度のつとめ、皆まぶのため、ちよいと、おかほをかり宅で、

甚介じんすけだました其金そのかねをかくして、おまへにやつちよるよ〜〜ね。

▲もてたお客きやくは、どうらくむすこ、内うちのおしゆびがあしくなる。

おやしはめ玉たまひからして、こゝとのおだんぎ、やつちよるよ〜〜ね。

▲〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

▲女郎ぢやうぢやうとほたるは、おしりひひかる、ないて客きやくとるきりぐす。

松蟲まつむし鈴蟲すずむしくつはむし、毎ばんがちやく〜やつちよるよ〜〜ね。

▲なすの興市きやういちに、真田まゐだの興市きやういち、あんま米市こめいち、しは。

酒さけのみはやたいち、やつちよるよ、やつちよるよ〜〜〜ね。

▲むかし〜の、桃太郎ももたろうさんは、おにが島おにがしまにてたからとる。

日本にっぽん一いちなるきみだんど、御供ごきようにやつちよるよ〜〜〜ね。

▲武家ぶけのちようれん、法印ほふいん様に、山やまし山やまぶしはほらをふく。

ほらがいぶう〜やつちよるよ〜〜〜ね。

▲花はなの兩りゆうごく、見世物みよもの芝居しばい、娘むすめ淨じやうるり、麥湯茶むぎゆぢやや見せ。

吹矢ふきやにどんかちようきうば、四文しもんやおでんをやつちよるよ〜〜〜ね。

▲〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

▲〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

▲花火はなびぼん〜、あがれよすだれ、げいしやころんでしのび駒。

辰巳假宅やつちよるぶし

▲上州茂林寺の、ソノじうもつは、とんだ茶がまに毛がはへた。

和尚も納所もきもつぶし文福茶釜に毛がはへた、やつちよるくくね。

▲兄がふへふきや、おやじがたいこ、弟はひつくりかへつて角兵衛じし。

おしゝのほら入ほらがへし、やつちよるくくね。

▲さしもこうとうな、おいらん衆は、花もいければちやもたてる。

おちや立茶立に茶ヲ立る、れんかにはいかい、やつちよるよくくね。

▲狐こんく、ねづみはちうく、猫はにやごく、狸はほんぼこぼん。

狸の金玉八丈じき廣げて、たくははらつみ、やつちよるくくね。

▲春のはじめに、忤をつれて、はやくよめなをつませたい。

としまのすくのはごまよごし、白はの娘もやつちよるよくくね。

ばんきう ねん さいずり、しやうめいしやうぶつまがひなし ないかんはん
文久二年の一枚刷、商名生物無偽擬名題招牌に、

辰巳 仮宅 やめちよるぼん

つゝおか客に
うねりら乃春
おやけんら
ねのあもち
おれいあもち
おれいあもち
おれいあもち



深川通のひ様子

川端

いまでも

百のころび

路端

やつちよろね

犬のころり

とある、是は伊豫節と違つて深川の假宅を中心として發生した安政の流行唄なのだが、長く續かない流行唄の例に漏れて、六七年も興せられて居たらしい。

爰に云ふ武家の訓練は、嘉明年間録安政三年の處に、『麴町一二の裏手火除原騎射馬場に於てホウロク訓練流行、右は諸御番方小普請組並次三男厄介等なり、但是迄の騎射人多し、中にも魁首と聞えしは大草瀧次郎井戸新十郎中川千萬藏等なり。赤白の指物にて所謂源平に倣へ戦争の訓練なり、衆眼を驚かす銘々甲冑又は竹具足等を着し、甲の前立に土器を付け、各馬上にて東西に隊を分け、使番ありて馬を馳せ、双方示令を將帥に告げ、將帥麾を懸れば東西寄せ來り、槍劍の試合にて右の土器打破られたる者負となる、又入替りく試合あり、尤東西に大將一人つゝ、各其大將を警衛す、敵方寸隙を伺ひ眞しぐらに駈寄、大將の土器を打破候を勝敗の規とす、見物群

辰巳假宅やつちよろね

集山の如し、前後一兩年専ら流行して後止む』といふ、それは錦繪にもなつて數番
版行された、しかし何の爲めに左様な事が起つたのか、無關心な江戸市民には好い見
せ物が出来たやうに眺められた、斯う俗謠に持ち込んだのも只だ其の見せ物が大評判
であつたからだ。

新しい仇文句虎のまき物

- ▲しよてはうわきであいぼれの、なれそめしよりこひのやみ、ふかふなるほどいとし
さが、むねにいちばいますかゝみ。
- ▲おまへゆへならどこまでも、つれてゆがんせゆくほどに、たとへやまなかひとつや
の、おにすむさともいとやせぬ。
- ▲にごるおとこのころから、ながれのみじやとうたがふて、ほかにかけひのもるみ
づや、ありもせふかとしがらみて。
- ▲わたしばかりにきをませ、いつもくるよはそのよふに、さゝによふてはねやしや
んす、はなしするまにあけの鐘。
- ▲よいのくせつのもつれより、たがひにはらをたつたやま、せなかあわせてねていて

も、こちらからあやまるほれたせう。

▲又はおまへにはらたせ、かへせしあとでくやみごと、ちやわんでのむもやけさけの、はてはじびやうのしやくと成。

▲もしやおまへはこれぎりに、こぬよふにならばなんとせう、おもひすごしてわしがみは、さきのよまでもあんじられ。

▲おもひつめたるおんなぎの、いちづにおもふころから、りんきにせまるひとすじは、あきらめられぬこひのよく。

▲とどは内しよでやかましく、せかれしときはからかさの、ほねみもくたくろふしで、すへはこのみもやぶれがさ。

▲はてはくらがへみづまりの、おまへも内はぶしゆびにて、くろふさんすもこひゆへか、いちにちましにおもやつれ。

▲ひけすぎまでもはりみせに、ひとりのこりしそのつらさ、人の目かほをよふくと、

しのびあふせたこうしさき。

▲ひどひつごうでぬしさんを、どふぞひとよはあげたひと、おもへど内しよであげもせず、せかれしみには何がなる。

天和貞享に品者といつた風姿が、後の仇つぼいといふ奴らしい、仇つぼいのは文化文政の江戸で騒がれた、その時恰も二上り新内が大流行であつた、我等などは仇つぼいといふ情味は是等の唄の中に横溢して居るやうにのみ感じる、二上り新内の情味は決して他の言葉では言へない、是非とも此の仇つぼいといふ言葉が入用だと思ふ。

けへせい買どらくさんげく

〽さんげく、六こん大しやう、おしめにはつはる、二日のはつ見世、まことに日ぼ
ん、いちしらいはい、初春もん日のはつやくそくは、こぞからしまふておくのいん、
見とふしざしきに御ちんざまします、おいらんおしよくのべんざいてん、しんざうか
ふろの十五どうじ、せんごをしゆごして、お客は其日の福徳いなり、末社の御神、
しやれとぶしやれで、ざをもつて、なじみのざしきのお手もと、おあいも、手ばやにお
さめて、めでたくすみよし大明神、夫れよりいもせのおんふた神は、ふたまざしきの
しんしよのゐん、びやうぶの玉がき、夜具のほくらにこもらせ玉ひ、きやたつの枕に
ひよくの目印、とくく咄て、子のひじり大こんけん。

〽さんげく、六こん大しやう、おしめにはつだい、こんがうどうじ、あいゑんきゑ
んのいちしらいはい、すいた客には、しよてからしろほり、誠をつくしに、だざいふ
天神、すかぬ客をば、しよてからじやけん、ふる川やくしはるり光如來、夫れこそ
みれんは内宮外宮、いせには兩社の天せう大じん、あさまがたけには、ふく一まん、
こくうにつとめて、お客をあやなす、あやはくれはの兩社の明神、うををうるのは、
しやうばいがらにて、只せへ誠と玉子の四角が、あればみそかに月が、出羽にははぐ
ろにゆどの、ひたちちにうそをつくばの明神、ねんがあけたらおまへの女房に、なりた
に大しやうふどう明王、其手でいくらも色のふかみへ客を、はめたのべんざい天、夫れ
を誠と、もしかにかゝる、やぼやたはけに付ける薬は、なぐさの郡、かだに、あはし
ま大明神。

〽さんげく、六こん大しやう、おしめとおはつがさみせん、さはぎにうかしたてら
れ、うてう天道大日如來、佛のはくよりひかりのはやい、小ばん小つぶで、傾城のつ
らを、はりまに人丸大明神、のめうたへや、一ツすんさきは、やみらみつちやに、け

けいせい買どらくさんげく

ふもゐつゞけ、あしたもゐつゞけ、うちにはへんしもいづなのごんげん、あまり遊あそひ
がてうん杉すぎの木、あはに大杉大明神、内ではおやぢのしらひげ明神、かんにんぶくろ
がきれとのもんじゆ、もはやりやうけん、ならにかすがの大明神、ごんごどうだんふ
とゞき四國の、さぬきにこんびら、こんせうぼねはしよせんなをらぬ、あいつが日ご
ろの、とらの日びしやもん、かないのあくまめ、はらふてくれんと、ついにはおやぢ
に見かぎりはてられ、かしまにかんどううけずの明神、一け一もん、しんるいゑんじ
や、ともにいんしんふつうに六しやの大明神、それよりむすこの大どらやくしは、
何とせんかたなごやに名だかきあつたの御神おんかみ、つしまに天王、てんぢくらうにん、こ
ゝに一トばん、かしこに二タばん、泊鳥とまりがらすのカー、かゞにはしら山ごんげん、心が
らこそ、くらうをしなのにとがくし明神、今さらめがさめ、思ひ知たる、我身のほう
らつ、後悔こうかいするがのふじはせんげん大ばさつ、あいみんなうじゆのいちしらいはい、
むさし南國なんこくに九やう七やう、まつらせ玉ふ、西方よつや千住ぢゆくはんせおん、北國ほくこくには

けいせいざん手くだの社やしろ、實まこともり公の御こん立、一たびはいする輩ともいは、金せんぢめん
土藏かさく迄、すくひ取んとの御せい願ねがひ、あいみんなうじゆのいちしらいはい、うや
まつて申す。

幕末はくまつには説經せつきやうと祭文さいもんと混合こんがふした説經祭文せつきやうさいもんだけで、純粹じゆんずかな祭文さいもんはなかつた、祭文さいもんの摸も
倣ほうと云つた處ところで、神下かみおろしの文句もんくに擬ぎしたもので、それも往々わうくにしてアホダラの調てう
子しになつた處ところのあるのが却かへつて面白おもしろからう。

松 づ く し

ㄣうたいはやせや大こくまいの

一本目にはいきの松、二本目にははの松、三本目にはさがり松、四本目にはしがの松、五本目にはごようの松、六ツむかしは、たかさごのおのへの松や、そねの松、七本目には、ひめこ松、八本目には、はまの松、九ツ小松をうへならべ、十ヲでとよくの伊勢の松、この松はふやうの松にて、なさけありまの松がえに、こゝろもあい、あいおひの松、まだいづくのやくそくに、ひをまつとき松くれを松、れんりの松にちきりをこめて、目出たいな。

ㄣ一本目には市村羽左衛門、二本目にはにつきは松本で、三本目には三がへ松、四本目にはしうかにて、五本目にはごめんやぐら下、六ツむまみは歌右衛門、尾上の梅幸、菊次郎、七本目には彦三郎、八本目には八代目、九ツ小園次はやります、十で訥升も宗十郎、此まくは、ぶたいまくにて、ひいきありまの若衆が、九藏のげいをみよしやと、またいつくのやくわりと、ひきまくときはづ三味をひく、ゑんぎの芝居と花みちかけて大はんじやう。

ㄣ一本目にはいきな客人、二本目にはほんぼう、三本目にはさむらい三人、四本目にはしはんぼう、五ほん目にはごろつき客人、六ツむだ客、しをばなで、ふられてかへるくわほふもの、七本目にはひねり客人、八本目にはほふかむり、九ツこいさみしやれ客人、十でとしよりお客人、此人はうとくの人にて、かねがありまの大じんと、小じよくをあい、あいをさせます、またいつけをたのしみに、ひけすぎときふだかけます、ゑんぎの客と、もちあげはやす、目でたいな。

松づくしは大黒舞の文句に擬して作つたものであるが、爰には其の松づくしに摸倣

した俳優はいゆうづくしと嫖客へうきゃくづくしと都合三種つがふしゆを収録しゅうろくしてある、製作年代せいさくねんだいは俳優はいゆうづくしの中に、訥升とつしょうも宗十郎そうじゅうとあるので、訥升とつしょうが弘化元年五月こうわげんごがつに五代目澤村宗十郎だいにめさむらそうじゅうを襲名しよめいした、其の時そのときなのが知れた。

道樂寺阿房陀羅經

▲あほたらきやう引そもく、このまた道樂おしやうが、お經の文句は、さつぱりしらばけ、いつさい衆じやうを濟度どころか、いつこう夢中で、せつ法だんぎは、どいつ端唄で、ちやらくらごまかし、ほうほけきやうの一部八くはん、錢の相場としやにむにこゝろへ、かんきん勤めは、そつちへそこのけ、そらばかつかつて、大めしくらつて、山伏もどきで、ほらばか吹たて、お布施がたまればのこくでかけて、肉食妻帯にくじき、出家のみぶんで、けだものだなへのめづりこんだら、ちい（モモンヂイの略）や豚鍋むしやうにくらつて、牛得大酒しやうとくのだしゆのおん作なされたごろ八茶椀で、ぐいぐいひつかけ、ほろゑひ機嫌で、あつちへよつたり、こつちへよつたり、ひとりの人が八人ばかりに見へるに、ぶつくだをまき舌、たいへいらくのな惡たい、

あげくは小間物みせをば、そこらあたりへげろりとぶちまけ、のたうちまはつて、あたりのどぶへどんぶりはまつて、まつくろ黒んぼ、これがまことのどろたの坊主だ、袈裟もころも、どふどろだらけで、くさくてたまらぬ、急いがさめれば、きものはいつしか、はいでとられて、すつてん天竺、おしやかなの誕じやう、まるのはだかだ、お寺へかへれば、所化も、なつしよも、おせうのありさま、みるよりあきれて、てんでによりあい、これさ、うんねん、きいてもくれやれ、住寺のらんぼう、一寺のおしよが、二升ざけくらつて、三どにあげづに、四の五のぬかして、六しやうにあばれて、七八おいては、ひどい九めんで、女にいりあげ、十方せかいの、極樂しやうどへ、人をみちびく坊主いみぶんで、地獄へはまつて、どらやにうはち、木魚も佛盆も、二そく三もん、ばつたりやすまし、くわん化奉加と、だんかをせびつて、錢金あつめて、長半ちよばいち、こんくよいどう、せんたいおのれが、すきはんぶんから、やすめをうりかけ、ねこそげとられて、寺へもどつて、ごうはら

まぎれに、こどとの八百、こぞうをどやして、御本尊なる、かなぶつさまのナ、おつむりこつく、げんこをきめかけ、天にむかつて、つばきをはいたら、つばはかへつて、おのれがつらへと、かゝるどうりで、げんこはきかずに、たゝいた手さきをいためたきみよさ、あアした身もちじや、うかんだもうじやも、ばけて出るのは、今夜もしれない、こんな所にながいをするなら、けつの毛までもぼうずにされるぞ、尻をはせをつて、逃げるがかんもん、どうせつぶれる當寺のしんせう、のらくら和尚が、色ざとがよひか、ばくちにでかけた、留守をつけこみ、寺の諸道具、本尊ぐるめに、いつかにからげて、本寺へはこんで、悪事のしりはり、そうした時には、なんぼのづらのづくにうどのでも、涙とみづばな、ぼたりくと、いつしよにたらし、て、さだめしめそく、泣くあみだぶ、なくあみたぶ、末世にのこす、悪名ほうれんげきやうく。

幕末に行はれた阿房陀羅經の型式は是が原本であらう、其の意専ら僧侶の無慚を罵るにある、それは文化文政より殊に甚しく僧行が亂れ、坊主の放逸は實に世間の眼に剩た爲めであらう。

我等は阿房陀羅經が何時から行はれたものか知らない、従つて其の原始とすべき文句や型式も知らぬ、幕末のは橋本町の願人坊主が門附けに、或は大道藝として演じた、さうでないのは何者が如何なる場合に如何なる状態で演じたものか一向知れない、けれども明和八年の『きめうてうらいちよい』は、正しく阿房陀羅經である、それから考へるとチヨンガレの轉化したのもかとも思はれる、阿房陀羅經の歴史を考へるのには無用でないと思はれるから、爰へ明和のきめうてうらいを書き附けて置かう。

皆さん聞なへ、四五年こつちへ、日本の金めが、右近がかゝれば、周防がほのめく、田沼が流とて、川井の樋から、水野へ落込、板倉升でも阿部ない事たぞ、世間が詰れば、眞鍮ぎせるが銀になるやら、棧留ばかりが丹後になりやす、娘子共は藝者に

成やら、銅釜錢でも四文の通用、本町通りにちらほら明店、赤繪に世に出て、めくりと成やら、四貫の相場が五貫になるやら、六位の武家衆が侍従に成やら、三汁五菜が湯漬に成やら、町人百姓が乞食に成やら、年季野良が長うたはじめて、曲り形ちも覺へて仕廻て、なんでもあたまは本多の事よ、着物の袖口ちや細いが時花か、なんのかのとて、是では茶釜が薬罐と化けても、御無理は有まい、此すへ大切用心しなさい、あげくのはてには、油もつゝいゑだ、元結もつゝいへだ、坊主になれとの、御觸か廻ろふ、今から衣の支度をしなさい、あんまり違ひは有まい、うるさいこんだにほう。
是は落書だ、讀賣になるものではない、勿論板行すべきものでもない、傳寫されて残つたのである。

道樂寺阿房陀羅經

上

▲おらがとなりの、又そのとなりの、いたづら娘の、おかよといふ子は、きのふけふ迄、四文のだん子を、よこ丁にくわへて、二本ばなたらして、ねんねを守り、あそんでゐたが、このごろ二三日、じこうのせい、知らないけれども、食ひけとねざうがさつぱりやんで、色けとつん出て、見よふ見まねに、諸品をつくる、あたまをなでたり、おけつをなでたり、髪をゆふにも、かみはかつ山、下むらいがらし、梅花のあぶら、匂ひの強い熊のあぶら、魚油あぶら、びんたのよこ丁に、こてくつけて、かんざし、銀かんざし、はつとふむきだの、鉛のかんざし、あたまが重くていけない、鐵のかんざし、火ばしのやうだの、眞鍮のかんざし、

のぼせのどくだ、だるまのかんざし、ころげていけない、てふくのかんざし、とびたつやうで、氣がうはきになりそふで、とび立やうだと、當世はやりの白ぢのゆかたに、しすか綸子の帯を、やたらやの字か、くだらぬくの字か、らくだのらの字か、へびりむすびか、間男むすびに、ちんまりしめて、みてにかうはな、すつまごつて、のみとりまなこで、お寺まいりは、がてんがいかない、それはよけれど、本ぞん様へ、眞向きにむかひて、ゑんどう豆だ佛、かた豆だぶつ、そら豆だ佛、かうたゝた佛か、なまよひなこだほふれんだぶつと、すこしおがんで、ざんげがすんだら、裏へまはると、裏にはちんぼこふだいのおせうさんが、おとしは十九か、二十のきれいなぼふさん、こんきをくだいて、學もんせい出す、ところにいるからおかよが、によりとつん出で、坊主がいやだといふのを、無理にとつらまいて、げんこで頭をこつんとたゝいて、これくぼうさん、おまへはよつぼどやぼな人だ、このたくさんな、肴もくはず、おかももたず、よたかもかはす、正月がきても、

ちよぼいちもしずに、こんきをくだいて、學問せいだすよりも、わたしがいけんで、げんぞくしなせ、げんぞくするはよけれど、おまへのあたまは、ぶいきなあたまだ、ものにたとへていふではないが、さんげ／＼のしやくじやうあたまか、六十六ぶのおいぶつあたまか、有馬げんばさまの火の見やぐらの、七ツさがりのかげぼしあたまか、又もながいが、てう半ぶちか、一ばんちよいと、かせかしがさいご、めつたにくだらぬ、こいつがほそくて、ながくて、ぶいきなあたまだ、還俗するは、よけれど、小いてう小まげや、水がみ銀杏や、かゝあたばねや、五分ながさかいきや、人わる見へて、わたしがきらいだ、わたしのは、ぶんのくどにすこしのこした、しいのみ本多のやつこがすきだ、なぞといゝてみな、たとへの通り、やつこと地とふにや、かなはぬどふりだ、なんのかのとて、おまへがげんぞくすれば、こはだの鮎はふるいから、子供だましの鮎でも賣りな、あめをうるなら、かううるものだ、あめや／＼、あめは一流太白鮎だ、やわらかにて、齒につかず、お子さまがたの腹ぐ

すり、させるのおれでも、火ばしのをれでも、べつかうのおれでも、二朱のかけたのでも、小ばんのかけでも、めつけたらもつてきな、とつかへべにしよふ、かねがないから口でちんがら、かんかんがらかんと、鮎うりそふな。

中

おまへのこゑは、ちようどかんから聲だ、その時わたしも、お客と見たなら、こばらがたつても、うはべぢや、にこはこ笑つて、たまのたすきも、ちよろりとほづして、おたばこぼんには、お火でも出したり、お茶くんで出したり、ちや／＼ら茶がわしも出したり、かつてまはつて、きうりのどぶづけだしたり、かくやにきつたり、せうゆをかけたり、つまんでたべたり、手ばなをかんたり、その手もふかづに、なまみそなめたり、なんのかのとて、ぼうずをだまして、これ／＼ぼうさん、わしとおまへと夫婦にならふか、とふふにならうか、おくは奥州、あだちが原まで、かけ

ぎよか、ひごいを見たよふに、はなづらそろへて、まむきにすはつて、おかよのおふきなおなかと、でつかへおけつを、さすつてゐながら、おかよぼう、かういふときには、女のたいやく、しつかりいきみな、うんすらうんと、もちつといきみな、うんすら、うんすらうん、おやくこの子は、ふだんにやはぬ、がまんのない子だ、かういふときには、もつとたくみのめの見へなくなるほど、ごさんのたづなを、もろてどおさへて、一ッしやうけんめに、ちからをこめて、うんといきみなもふ。

下

ひとついきみな、いま出る、やれ出る、それで、うんといきみなといはれて、ばかおかよが、とりあげばあさんの、ちようしにのつて、一ッしやうけんめに、うんのうんのといきんだところが、まへのほうから、おぎやあくといふ、ねんねへがでないで、おしりのほうから、ひるまたべたる、おさつのかげんで、ぶうすうば

かんと、おならがうまれた、此又おならが、たいそなおならで、八丁四方はしんどうらいでん、かいくもり、近所のなべかま、いちどにこはれて、六枚びやうぶをひつくりかへし、あんどんひりけし、三ッになる子をひりころし、かべをひりぬき、とりあげばあさんを、いぬいの方へひりつけて、ねだいた三枚ひりをつて、此又へ玉のあまりが、どこへいつたとたづねて見たら、下にねていたつんぼの長太郎おやぢのあたまへ、へ玉がすうとか、れば、長太郎おやぢは、あはてさはいで、みぎのお手てで、でべそをおさへて、ひだりのお手てで、へだまのあたつたあたまをおさへて、おかよのおならと、はつかみなりさまと、とりまちがへて、一ッしやうけんめに、くはばらまんざへらくくと、どつこへちがつた、くさはらまんざへらくく、はなははなとてつんまんで、がまんもしようが、おかよのおならのことなら、めくちにしみたら、まつげがかれそだ、かういふときには、せつぶんの豆が、よいとのせ間のうはさ、ちいさんむつくりとびおき、せつぶんの豆をくちへ、一ぱいほ

ふり込んだが、ちいさんお齒がなければ、あつちをむいては、ぼつ〜、こつちをむいてはぼつ〜、こつちをむいてはぼつ〜、ひかげ豆もはちけるやうに、ぼつり〜とよふ〜おくばの三枚めあたりを、さがして、こり〜とかむあみだぶつあみだぶつ〜。

おおよのおならでもんとしゅうのこゑかう

いにしへのおならのみやこ、やへかつら、けふ九のへに、ひきて、そふれにしへはさいごべ、さくらのくさいのふねにうちのりて、みのたいへいぞ、たれながす、おうたにいわく、ひるなれば、人めかくさず、ぶうぶとひれ、すかしてするは、いかるせつしよう、とかくにんげんは、へいをだせよ、へいさへだせば、ういもつらいも、ふんどしもゆるむ、ぶうげんじやになるぞよと、せけんにはぼつとにほふなり、おねんぶつが、なむあみだあぶ、うすふ〜〜。

酒づくし御ゑかう

うは、あま國のほうけんにして、はさむさかなは、そうの天神、からしづけは、は

なをとうす、うしてんじん、ぐる〜まわりのさかづきは、いづれおつこちにおもひざしとして、梅のとび梅、むめのつぼみも、いりくる人が、さけ〜といふから、どふらくおせうは、ますのみからしんぐひ〜、とのもふちよ來とあをりたてまつれば、酒をのますして、ついには酒にのまれて、ほふ〜の酒屋の酒だいに、ざし玉ひ、口からでたらめのぶう〜をいひたて、あとではあたりきん所へめんぼくないだいちん、さけのわんぱくよい〜天王となる、がふり〜とのたいし三升五合〜。

是は稍、型式の變つたものである、稻荷鮓は次郎右衛門といふもの、石町十軒店に出で賣る、其の初めは天保七八年の凶歉に賣出したものだといふ、弘化二年版の稽古三味線には十軒店の信田鮓、稻荷さんの呼聲とある、それは弘化度の流行物であつた、天保改革の際に高價な食品を嚴制したので、次郎右衛門も思ひ附いたのであらうが、其

の稻荷餅いなりやしも此この阿房陀羅經あほうだらかやうでは、古いと云つて居る、それもその筈はず、創製さうせいからはもう三十年ねんちか近く経つたのであらう、しんぼ興臺寺こうたいじ踊どりといふのは、天明てんめいの凶年きやうねんに江戸えど近い村々むらから婆々はあねんぢやう連中れんぢやうが、市内しんないへ物貫ものぬらひに出て來て踊つたものだ、新發幸大寺しんはふかうだいじ不實錄ふじつろく、新補しんほ幸大寺かうだいじなと、題だいした戯作げさくも刊行かんかうされて居る。

鹿兒島戰爭道樂寺阿房陀羅經

南無なむらんぼうやぼたらぎやう、さてこれからいよくはじまるおきやうのもんくは、なんでありませうなら、薩州鹿兒さつしゆかごしまそうどう咄はなして明治十年二月のはじめの新聞しんぶんかんぶん、それからそく／＼ごたつきはじまる、それはなんだときいてみたらば鹿兒かごしまおもての學校生徒がくかうせいとが、むちやくちやがくもん、孔子こうしが老子らうしか思子しならも／＼んじ、子夏かなら大馬鹿おまはか、熊くまつた猿さるぢゑ、さんぼんたりない、毛けほどの事ことをば棒ぼうもつおひとの宅たくへとおしかけ、よつてたかつて、むりおふせうに、せめていわせた大事だいじの一件いっけん、くちがきつめ印いんさせたがはじまり、そのまたまへには東京とうきやうまはしの、合藥かうやくうばいて、けんてうさはがし、それからそろつて、西郷おやぢのやしきへおしかけ、先生せんせいとつくりきいでもおくれよ、こゝへ持ぢさんの口書見玉くちがきみへ、先生せんせいころしにまいつたやつらを、あゝし

てこふして、よふく白状させたるくちかぎ、これがろんよりせうこであるぞへ、これでもせんせいおちつきはらつて、在宿ふるが、あんまりいんじゆん、ねんじんごぼふを堀てはいられぬ、紫そのいふ事、蓮葉かしらぬが、東京おもてへ出ちやう茄子べし、そうして政府へ見て見たなら、根のある事やら、葉のない事やら、かぼちやを見るよにたゝゐて直ちめを、ひとやまやらかせ、われくみどもが、一同揃ふて、いのちの限りをあぶないところでも、おんともするなら冥加にあまつて、生姜のめんぼく親や女房にきうりきろふが、桐野に篠はら、三人大しやう、へご組そろふて、芋でもたんとくつて、東京へおしだしや、くはい事ない、おんげん五十のたとへもあるべい、ぐづぐづいふやつア、かたつばしから握りべ、はしごべ、スツくブツく砲門そろへて、西郷べひつかけ、かちをとるのが、おくにの奥の手、そうだんとゝのひいよく尻だう具、のこらすとゝのへ、夜るもひるもとれん中あつめて、隊伍をくむとか、大鼓をうつとか、どやぐさはいて、馬場へとおし出す、そのまただうぐは、

八百屋の椽のした、ながいみじかい、西洋に和筒に、れうしを見たよだ、それからしのはら、せんぢん大將で、きりのが二ばんで、三ばんしんがり、西郷大將、いよくさつ州、鹿兒しまおもてを、うよくぞろく、ありのげうれつ、一萬五千の人数が出立、こゝつは大へん、こまつたものだと、大やまけん令、東きやうおもてへ、けんばく書たり、熊もとおもてしらせを出したり、めつばまはして三べんまはつて、こゝらでお尙がたばこを一ぶくのむあみだく。

下

扱も賊徒の先陣一むれ、熊本城下へどやぐおしこみ、そのまた言ぐさ、聞ても呉んねへ、いよく出かけた西郷連中、ぞろくもじやく髭面並べて、隊伍を組立、筒先そろへて、目玉をむき出し、やたら味方におしこむ人数は、士族は元より、農でも工でも、醫者でも儒者でも、按摩は目あきで、つんばも脊むしも、せん氣も我まん

で、金玉抱へて出なけりやならねへ、くやくぬかして握りべかじせて引ずり出した
ら青萬五千か城下へ来るから、城中のこらす、へい口するとも、へいつくばるとも二
ツに一ツの、命がもと手のへんじを聞くと、すてきめつぼう、あきれたもん句に官軍
方には怒りにたへかね、おへそを廣げて喇叭を吹たて、ごうはらわかして茶まげたこ
んだよ、賊徒のい、ぶんあんまりあきれておどろき桃の木、山椒のすりこぎ、鹿兒し
ま表 芋ほり百姓 土びんか土びんか茶わんの欠なら直うち知れたる瓦落た者ど
も、かたつばしからかざあなあけるぞ、まごくするなと使を追出し、すみから隅ま
で、おふれがまはつて、市中はごたすた、火事場のやうだよ、そこらにうか／＼居ら
れる者よと、荷物をかついでぢいさん婆さん權すけおさんも、あはて、轉んで、下か
ら持上る力もなく／＼、こんなあはれな道行きやあるまい、なんだかかんだか風聞ま
ち／＼、火の手が上つた、こいつは大へん、城下はだん／＼野はらとかはつた、めつ
ぼう大なきてつ炮がぼん／＼、きこへてひびけて天地も一度にひつくりかへるぞ、ひ

つくりしやツくり戸棚のすみから、寝ぼけた小僧も裸かでとびだす、二階の隅やら土
藏のかけやら、せつちん掃だめ、どしこと當つた、大玉小玉はたま屋じやないぞへ、
賊軍一同屁ぶたをひらいて鎮だ目かけて打だす筒先、腰にはてんでにすぶとい大
小、横たに手狭、天狗の矢とりが枝から落こち、ぶる／＼ふるへてこんにやくお芋の
おでんを見る様だ、其又仕たくはとつちんかん酒あはもりひつかけ、陣笠股引しやツ
ぼや筒ッほ、和筒や西洋、重いも軽いもむやみにかついだ、學校生徒は甘いとからい
で、西郷親父がなつけた若者、眞先すゝんでお先はまつくら、あんまの夜ばいにや手
引はいらねへ、文句もいはずにやたらにかぎ出す、隊長別府が號令はげしく、火の子
を追よだ、くわん軍方では、城の四方の口々固めて、手はずも十ぶん兵糧もやらかし、
賊をねらつて大砲うちかけ小銃をそろへてあけてもくれてもどん／＼びい／＼とききの
聲あげ勇氣の城兵あんにやもんによで命のとりやり、しゆらのちまたの場所がへ見る
よな、あはれなこんだよ、つれないこんだよ、無情やたらに賊徒はうたれて、倒れて

ころ／＼芋蟲いもむし同せん、所せんお芋いもにえんあるみともじや、里さとのはたけでぞだつたどろいも、ずいきき氣きまゝがこうじたあげくだ、まけてもひけても何なんでも構かまはず、目くらめつぼう戦たたかかう後うしろに、福岡鎮臺ふくおかちんたい其ほか官軍くわんぐんせつせとかけつけ、城兵じやうへいいかゞと援兵えんぺいなさるゝ、そこで和尚おしやうが、賊徒降伏ぞくとかうふくのお經きやうをよむだぶあみく。

是これは主しゆとして時事じじを取り入れてあるが一向かうに警句けいぐもない、随分間ずぶんまの抜ぬけたものだ、幕末はくまつには落書らくしょの中うちに上手じやうずに時事じじを取扱とりあつかつたアホダラ經きやうが澤山たくさんある、孰いれも輕妙けいめうに敏捷びんせつに善よく滑稽こつげいながらに諷刺ふうしし、痛罵つうばし、縦横じゆうわうに機智きちを働はたらかせるのを常つねとした、けれども忌諱きみすへきものだけに讀賣よみうりは云いふまでもなく、秘密ひみつにも刊行かんかうされたものは一種しゆもなかつた、時事じじを公然こうぜん取り入れたアホダラ經きやうの版行はんかうが珍めづしくないでもない、とは云いへ斯かう間拔まぬけて居ゐてはお話はなしにならぬ。

世の中こまりもの一ツトセぶし

上

- ▲一ツトセひろい日本にっぽんばかりにして、あめりかけとう人がはたりきて、コノこまり物。
- ▲二ツトセふそくもなへによくふかゞ、とうじんよんだが身みのつまり、コノこまり物。
- ▲三ツトセみなさんゆうのにちがへなし、横よこはまできたが世よのつまり、コノこまりもの。
- ▲四ツトセよくになん る物ものを、つめなが親おやじがよびよせて、コノこまりもの。
- ▲五ツトセいつまでこういきいだすのか、ひましにしよしきもねが上ある、コノこまりもの。

- ▲六ツトセむやみにいこくでかうものは、四そくで、ぶたうし馬もかへ、コノこまりもの。
- ▲七ツトセなんでもやたらにかいあげて、安賣やすうりする人さらになし、コノこまりもの。
- ▲八ツトセやがてみしやんせ、このくにが、だんくづまりにつまるだろ、コノこまりもの。
- ▲九ツトセこのまゝすてをく事ならば、そろくむほんもをこります、コノこまり物。
- ▲十トセとう人ばあばが、おとつさんで、おかみさんは、日本人で子ができる、コノこまりもの。

下

- ▲十一トセ一ばん高いはきぬもめん、ごふくにわたるい糸のるい、コノこまりもの。
- ▲十二トセ二百の手ぬぐい豆まめがむる、五百のふんどし金がむる、コノこまりもの。
- ▲十三トセ酒も高くてのまれない、そのせいかな、なまよいみた事ない、コノこまりもの。
- ▲十四トセしもぐこんきうでなさけない、高もち親おやじは大いばり、コノこまりもの。
- ▲十五トセ御米おこめやあぶらが、たかいとて、よいからねたれば子ができた、コノこまりもの。
- ▲十六トセ六合もせめてすればよい、二合や三合ぢやくはれない、コノこまり物。
- ▲十七トセ七をおくにはしがない、かす人せけんそれに夫になし、コノこまりもの。
- ▲十八トセはらがけ一分ぢやもふできぬ、三分のふるぎわきられない、コノこまりもの。
- ▲十九トセくれのもちつくあてもなし、是からつくのは、うそばかり、コノこまりもの。
- ▲二十トセにぎあふ、あけて松かざり、世は松平で御目出度おめでたい、コノおめてたい。

横濱開港は安政六年。

唐人バア／＼がおとつさんといふのは、本邦婦女が外人の妾になつたことか、それならば萬延元年六月、横濱本町二丁目文吉娘テウが阿蘭陀領事某の妾になつた、是がラシヤメンと稱せられた最初の女だといふ、外人の妻になつたのは、慶應三年五月、神奈川奉行水野若狭守が、英國領事に對して、爾後條約國人は差支なく、尊卑の別なく、双方出願許可の上、婚儀を整ふべき旨を回答した以後でなければ、外人と公然夫婦にはなれない筈だ。

二合や三合といふのは錢百文に對する米相場なのだ。



横濱の模様の見せもたの

新板諸色一ツトセぶし

- ▲一ツトセひろいせかいで、たかいもの、ふじのおやまにこめさうば、コノときさうば。
- ▲二ツトセふたつ、たかいをたづぬれば、ありまさんのひのみにぶん久せに、コノときさうば。
- ▲三ツトセみさげられたるわたしでも、いまではてんぼうとひとがいふ、コノときさうば。
- ▲四ツトセよひにちらりとみたばかり、ふられたおきやくのあさがへり、コノときさうば。
- ▲五ツトセおこくのおりもの、らしやるいや、とうごろかなきんおしはやり、コノときさうば。

きさうば。

▲六ツトセむやみにぶけがたてうれんの、とうじんすがたもやすすくない、コノときさうば。

▲七ツトセならづけ、たくあん、うめぼしも、おかみのいりようでねがあがる、コノときさうば。

▲八ツトセやたらにねだんがあがります、ゆたかになるならあがります、コノときさうば。

▲九ツトセこめのたかねもながとゆへ、すわういはくにかみまでも、コノときさうば。

▲十ヲトセときのさうばといくながら、二合のうちではきがひける、コノときさうば。

下

▲十一トセイやがるゐこくのけとうじん、ゐるゆへ、しよしきのねさげなし、コノと

きさうば。

▲十二トセにつぼんせかいがまんさくで、なれどもごくのねあげする、コノときさうば。

▲十三トセさかやでますぎけのむ人も、おこしが、かるくてのみたらぬ、コノときさうば。

▲十四トセしよしきはのこらず、みなあがる、さがるをまつ人かづしれず、コノときさうば。

▲十五トセ五もんのあぶらげ八文で、すみまきあぶらもほうづなし、コノときさうば。

▲十六トセラうかで、おへやをながむれば、おかゆで二じきじやはらがへる、コノときさうば。

▲十七トセしちやのなかまがりあげして、いれゝばだすのをまつばかり、コノときさうば。